

北欧における教育、ジェンダー・先住民族等 政策に関する調査

2025/3/24 ~ 3/31



「北欧における教育、ジェンダー、先住民族等政策に関する調査」

2025年3月24日～3月31日

＊調査目的

- ①アクティブラーニングの具体事例や自然との体験を通した幼児教育について、本道での導入や普及の可能性を探る。
- ②先住民族への差別の実態や自決権等の導入経緯などを検証し、アイヌ政策への比較検討をする。
- ③ジェンダーギャップ改善の為にクォータ制導入経緯とその経過について検証する。

【調査先】

＊フィンランド（ヘルシンキ市・エスポー市）

ネウボラ施設（エスポーファミリーセンター）

プレイパーク

エスポー市営図書館

ヘルシンキ中央図書館『Oodi』

▷サヨス（ラップランド）

サーミ博物館「SIIDA」

サーミ議会

＊スウェーデン（ストックホルム）

スウェーデン国会

在スウェーデン日本国大使館

スタートアップ企業（非営利組織・broke craft）

ストックホルム近代美術館

（航空機欠航等の為に予定変更、一部調査先をキャンセル）

北欧における教育、ジェンダー、先住民族等政策に関する調査（日程）			
日次	月日（曜）	地 名	日 程
①	3 / 24 （月）	新千歳発 羽田空港着 羽田空港発	移動 国際線にてヘルシンキへ
②	3 / 25 （火）	ヘルシンキ 着 エスポー市、ヘルシン キ市	ネウボラ関連施設、プレイパー ク、図書館 （ヘルシンキ泊）
③	3 / 26 （水）	ヘルシンキ発 イヴァロ着 サヨスへ	サヨス・カルチャーセンター、 （サーリセルカ泊）
④	3 / 27 （木）	サヨス	サーミ議会（サヨス）聴取・意 見交換 （サーリセルカ泊）
⑤	3 / 28 （金）	イヴァロ発 ヘルシンキ経由 ストックホルム着	移動日 在スウェーデン大使館、国会議 員との意見交換、 （ストックホルム 泊）
⑥	3 / 29 （土）	ストックホルム	美術館エリア視察 語学支援アプリ開発企業 及び大学教授との意見交換と調 査総括 （ストックホルム 泊）
⑦	3 / 30 （日）	ストックホルム 発 ヘルシンキ経由羽田空 港へ	移動 （機内泊）
⑧	3 / 31 （月）	羽田空港経由 新千歳 空港着	移動



参加議員	所属	選挙区	委員会
藤沢 澄雄	自民党道民会議	日高地域	文教・エネ
中司 哲雄	自民党道民会議	根室地域	保福・人口
広田 まゆみ	民主・道民連合	札幌市白石区	文教・北方
佐藤 伸弥	北海道結志会	網走市	建設・食観
赤根 広介	北海道結志会	登別市	総政・交通
畠山 みのり	民主・道民連合	札幌市南区	保福・エネ
川澄 宗之介	民主・道民連合	小樽市	文教・子ども
榎垣 尚子	自民党道民会議	札幌市中央区	経済・子ども

目 次

2	調査目的
3	調査日程
4	派遣議員名簿
6	行程 ① 移動日
7	フィンランド概要
8	行程 ② ネウボラ・プレイパーク・図書館
16	行程 ③ サヨスカルチャーセンター（サーミ博物館）
18	行程 ④ サーミ議会
23	行程 ⑤ スウェーデン国会、在スウェーデン日本国大使館
31	行程 ⑥ 語学支援アプリ開発スタートアップ
33	行程 ⑥ ストックホルム近代美術館
36	座談会
46	所感
47	中司哲雄
52	佐藤伸弥・赤根広介
54	畠山みのり
56	広田まゆみ
66	川澄宗之介
68	藤沢澄雄・檜垣尚子

北欧（フィンランド・スウェーデン）調査



(出発前、新千歳空港)

(2025, 3, 24~3/31)



北極圏を通るルート13時間



早朝、ヘルシンキ空港着

【フィンランドの概要】

*スウェーデン、ロシア、エストニアに接していて、面積は日本の四国を抜いた程の大きさ。人口は約560万人。首都ヘルシンキの人口は60万人強。

フィンランド語が公用語であるが、ロシアからの独立（約100年前）以前はスウェーデンの支配下にあったため、スウェーデン語も公用語となっている。

#消費税の現状と課題

- 現在の消費税率は24%。25.5%への引き上げ案に不満の世論。（日用品は25.5%、食費は14%）

#医療費と診療の現状

- 地域のクリニックが診療所として機能。（町医者制度）
- 総合病院の初診料は100ユーロを超えることがある。
- 65歳以上は公的サービスを受けられる。

#年金と生活支援制度- 年金受給開始年齢は生年月日により異なる。若い世代は66歳～67歳で受給開始。

- 年金の最低額は800ユーロ程度で、生活が厳しい状況。
- フィンランドでは生活支援を積極的に受ける文化がある。
- 学生も親元を離れ、生活支援金を受けることが一般的。

子育て支援とネウボラサービス

- ネウボラサービスの現状



- ネウボラは母子の健康を支える無料サービス。

- 最近ではサービスの回数や時間が制限されている。

- 親子関係を築くための訓練やケアが必要とされる。

- 北欧の税金と社会サービス

- 北欧では高い税金が社会サービスに充てられている。

- 高齢者や一人暮らしの支援が充実している。

政治と選挙

- 学校での模擬投票と青年議会

- 中学校で模擬投票が行われ、議

員が招かれる。

- 青年議会では若者が地域の問題について意見を述べるができる。
- 投票率は70%程度で、若者の参加が増えている。

【3月25日（火曜日）】行程②

ネウボラに関する調査。ヘルシンキ市に隣接するエスポー市のファミリーセンターを訪問。



*エスポーファミリーセンターは2022年5月にオープン。250名のスタッフが働いている。

「ネウボラについて」

> ネウボラはフィンランドで提供される母子保健サービスで、妊婦と子供の健康を支援するための無料のサービス。1922年に開始され、1926年にヘルシンキで診療所がオープン。子供の健康状態や予防接種、親の支援を提供していて、乳幼児の死亡率を15%から3%に改善したという報告がある。フィンランド国内に900箇所存在し、母親の99.7%、子供の99.5%が利用している。他の機関と密に連携し、児童保護や社会福祉、警察とも協力する体制がとられている。

また、フィンランド語を母語としない移民が約40%を占めているため、言語の壁を考慮する必要があるという。



人間関係の成長を確認する。

* ネウボラナースは、200人の子どもを担当し、必要に応じて児童保護に連絡する。

* 移民や難民の家族に対しては、文化的背景を理解し、適切なサポートを提供する。

#ネウボラ制度

* 子どもの成長検診は、4ヶ月、8ヶ月、18ヶ月、4歳児のタイミングで行われる。

* 保育園との連携により、子どもの言葉や



#フィンランドの出産費用と医療制度

> 出産費用は非常に低く（40～80ユーロ程度）、外国人でも同様の費用。

#育児休暇制度

> 子供が3歳になるまでは育児休暇を取得でき、職場復帰が保証されている。育児休暇中も給与が支給されるが、徐々に減少する。

#フィンランドの移民政策

> 90年代の経済危機を背景に、移民や難民に対する福祉サービスを特定の地域に集中させる政策が取られた。これにより、移民コミュニティが形成され、相互支援が可能になったが、地域社会への適応が難しくなるという問題も生じている。



* IT化が進む公共交通（地下鉄、鉄道）を使用しエスポー市へ。



鉄道、トラム、バス、地下鉄共通チケット売り場（スマホでも決済可能）

タッチ決済



地下鉄駅は広く避難シェルターにもなっている



トラム



地下鉄
(鉄道なども自転車、ペットの乗車が可能)



鉄道



ヘルシンキ中央駅



改札口の無い鉄道ホーム

【プレイパーク】

プレイパーク（学童保育）の運営と公園の利用状況などについて

- 学童保育の概要

- 学童保育は市が運営。毎日50人ほどの子供たちが放課後に訪れる。
- 学童保育のメンバーではない子供や保護者も公園を利用しており、常に約100人が出入りしている。
- 学童保育のスタッフは4人で、子供たちは宿題をしたり、食事をしたりして過ごす。



公園の利用と活動

- 公園は住民公園として、学童保育のメンバー以外の住民も自由に利用できる。
- 子供たちは公園で様々な遊びを楽しみ、時にはディスコなどのイベントも開催される。
- 公園の設計は自然の形を残し、安全性を確保しつつも自由な遊びを促進している。

子育て支援と保護者の関与

- 子育て支援の取り組み

- 午前中は子育て支援の時間として、赤ちゃんや保護者が参加できるプログラムが提供されている。

- プログラムにはダンスや体操などが含まれ、親子で楽しめる内容となっている。

- 保護者とのコミュニケーション

- 保護者との対話の時間を設け、子供たちの活動や希望について意見を聞く機会を設けている。

- 保護者は子供たちの安全や活動内容について関心を持ち、積極的に関与している。



安全性と保険

- 公園の安全対策

- 公園は自然の形を残しつつも、安全性を考慮した設計がされている。

- 事故が発生した場合は保険でカバーされるが、門番などの特別なセキュリティは設けられていない。

- 保険の役割

- 保険は事故や怪我に備えて加入されており、保護者も安心して子供を預けられる環境が整っている。

子供たちの自主性と活動

- 自主的な活動の促進

- 子供たちは自分たちで活動を考え、ディスコなどのイベントを企画することもある。

- 公園内では自由に遊び、創造的な活動を楽しむことが奨励されている。

- 日本とフィンランドの比較

- 日本の公園ではボール遊びや大声を出すことが制限されることが多いが、フィンランドでは自由な遊びが重視されている。

- フィンランドの公園は自然を活かした設計がされており、子供たちの自主性を育む環境が整っている。



多文化教育と言語習得

- 多文化環境での教育

- 様々な国からの子供たちが集まる環境下で、教育の重要性について議論があった。

職業と資格取得

- フィンランド語での教育

- フィンランド語での授業を受けられるようになるには3年程度かかるが、努力が必要であると強調されていた。

子供たちの遊びと社会の変化

- 子供たちの遊び環境

- 子供たちが公園で自由に遊ぶことの重要性が感じられた。

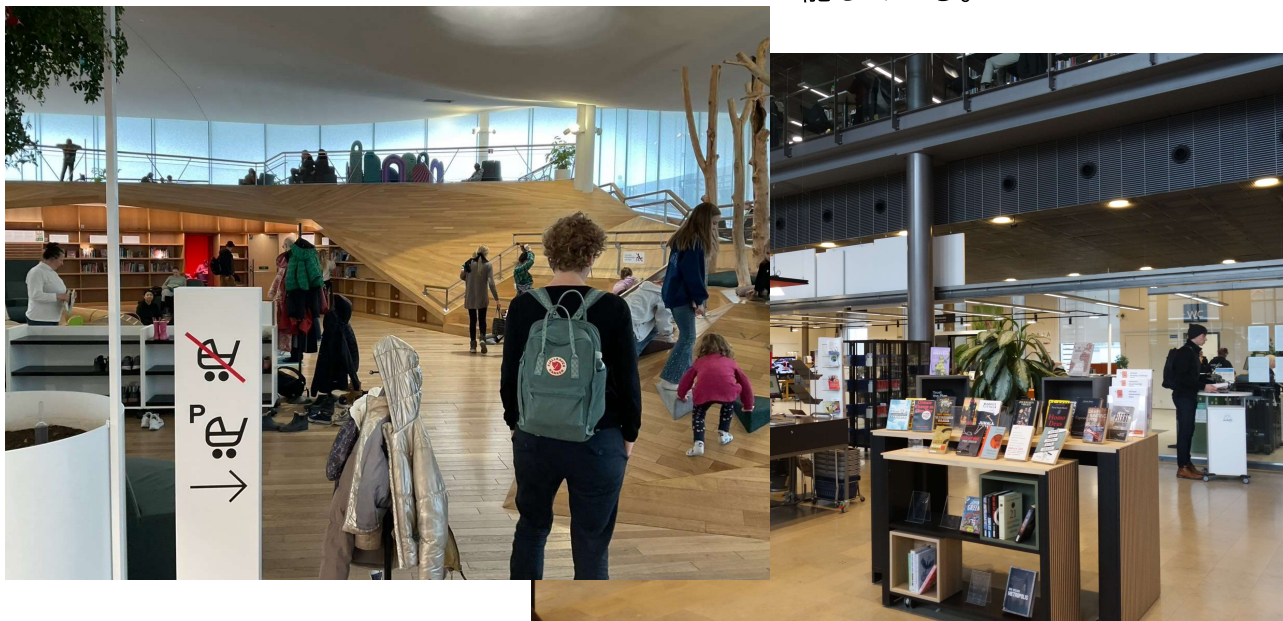
- 社会の変化と子供の遊びについて

- 現代日本の社会では、子供たちが大きな声を出すことが難しくなっているという指摘がありました。



【フィンランドの図書館】

＊フィンランドの図書館は、単なる本を読む場所ではなく、地域社会の活動拠点として機能している。



- 子どもたちがダンスをしたり、高齢者が体操教室を行ったりするなど、多様な活動が行われている。

- 掲示板には、様々なイベントや活動の予定が掲示されている。

- 市役所のサービスポイントとしても機能している。

- 地域のサービス情報を提供している。

- ダンスや編み物、情報収集など多様な活動が行われている。

- コンサートのチケットも購入可能で、文化的な活動の拠点となっている。

- ニュースセンターとしても機能し、様々な情報を提供している。

- 学校が終わった後の若者が集まる場所として機能しており、様々な事情で訪れる若者を受け入れている。

- 警察や社会福祉事務所と協力し、地域社会の問題解決に貢献している。

＊若者の活動と支援

- 若者が自分の夢や目標を見つけるためのサポートを行っている。

- 図書館は、若者が悪い道に進まないようにするための受け皿として機能している。



図書館の未来

- 図書館は、地域社会のニーズに応じて進化し続けている。
- 図書館は、地域社会の文化的な発展に寄与し続けることが期待されている。

教育制度と進学

- 無償化された教育制度に 子どもたちの遊び場 についての議論があり、日本で話題の教育無償化の結果、浮いた 家計予算を新たに塾などに使う懸念があることが指摘されました。
- 職業学校と大学の連携についての説明があり、大学の講義を受けることが可能であることが確認されました。

職業教育とキャリア

- 職業教育の重要性についての議論があり、キャリアアップの機会があることが説明されました。
- 地方の企業での役員募集についての話があり、応募者が多いことが確認されました。





自由な空間



男女共用トイレ（照明点灯で使用中）



3月26日（水曜日）行程③

【サーミ博物館】ラップランド

北極圏域の先住民族である「サーミ族」に関する国の政策や社会問題などについて、今後のアイヌ政策への大きなヒントとなるものとする。



サーミ博物館のサーミに関する歴史とその役割、サーミ文化の復興と活性化、環境保護の重要性についての説明を受けた。

（サーミ人の文化や言語、歴史的背景、そしてフィンランド政府の支援についても触れられている。また、展示品の選定プロセスやアート作品の展示方法についても議論を行った。）

＞ 1959年にサーミ人がミュージアムをオープン。その後、野外博物館が建てられ、幾多の改修を経て2022年のリニューアルにより現在に至る。

展示物に関して、世界各地へ分散された貴重な資料の返還を求めている。

展示の説明にはサーミ語（三種）の他に、英語、フィンランド語、スウェーデン語で表記されている。

＞ 1990年代からサーミ語の復興と活性化が進められており、現在では400人程度の話者がいる。

* 教育機関でのサーミ語の使用が推進されている。

＞ サーミ人の言語は数千年前から存在し、文字としての表記が進められてきた。フィンランドの地名にはサーミ語が残っている。

＞ ラップランド地域は第二次世界大戦でナチスとの戦いで大きな被害を受けた。焼き払われ、破壊行為が行われ、住民は避難を余儀なくされ



た。

> ラップランドの復興はサーミ文化の復興と同時に行われてきた。

> アイヌ民族との交流は1980年から続いている。



*民族と文字について

サーミ族は文字を持たない民族なのか？

世界の多くの民族は、外部から文字を持ち込んでその言語に当て嵌めてきたという歴史を持つ。現代になってそれが行われたとしても「文字を持たない民族」と断ずることはできないのではないだろうか。（私見）



【サーミ人議会】 行程④ (2025-03-27)

サーミ人議会とその活動、サーミ人の文化、言語、政治参加、教育、そしてフィンランドにおけるサーミ人の権利などについて議論した。また、アイヌ民族との比較や文化、観光、教育教材の開発についても説明があった。

サーミ人議会

- サーミ人議会はフィンランドにおける自治組織であり、サーミ人に関するすべての事柄について国と接点を持つ機関。



- 議会は1969年に設立され、1973年から自治議会として活動を行っている。
- フィンランド憲法に基づき、サーミ人の少数民族としての地位が確立され、文化的な自治が認められている。

サーミ人議会の役割と活動

- 法律や法制度への影響力を行使し、サーミ人に関するプロジェクトに関

与。

- 交渉や協議、ワーキンググループを通じて影響力を発揮。
- 財源に関しては、社会福祉、保健医療、イマージョン教育、幼児教育、文化に関するものが例外として扱われる。

サーミ人議会の構成

- 本会議は年に約5回開催され、21名の議員が参加。
- 執行部は7名で構成され、3名が議長団に属し、1名が議長を務める。
- 専門委員会として、教育教材委員会、社会福祉保健料委員会、経済法務委員会、地方委員会、言語審議会が存在。

選挙と北欧間の協力

- 議会の選挙は4年に1回行われ、21名の議員が選ばれる。
- ノルウェーやスウェーデンにもサーミ人議会があり、北欧間の協力が行われている。



サーミ人議会法の改正

- サーミ人議会法の改正を望んでいるが、これまでの政権では成功していない。
- 現在の法律では、誰がサーミ人議会の選挙に投票権を持つかが問題となっている。
- 少数民族の定義が法律に織り込まれていないことが最大の問題。

少数民族の定義と権利

- 少数民族の定義は個人が自分で行うべきであり、外部からの規定は権利の行使を妨げる可能性がある。

サーミ人とフィンランド政府の和解プロセス

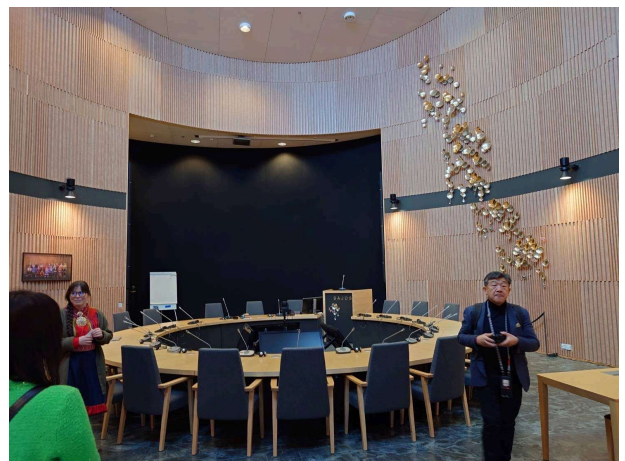
- 今年中に終了予定
- 現在有効な和解プロセスが満了する

サーミ人の歴史と現状

- 歴史的背景と現在の状況
 - サーミ人に関する歴史認識を明確にすることが求められている
 - 現在の3000人に対する状況の明確化
- 改善点の提案
 - 幼児教育におけるサーミ語教育
 - 気候変動に関するサーミ人の権利

民族の定義と有権者の線引き

- 選挙における有権者の数
 - 前回の選挙では6000人強が有権者となった
 - 有権者となるには自己申告が必要
- フィンランドのサーミ人の数
 - 推定1万人程度
 - サーミ人でなくてもリストに入ることが可能
- ラップ人基準
 - 先祖がラップランドに住み経済活動を営んでいた記録が必要。（サーミ人でなくても認められることが問題となっている。）
 - フィンランドではサーミ人でなくてもラップ人の生活手段を営むことが可能
 - 最終判断はフィンランドの行政最高裁判所に委ねられている。
 - 国連からフィンランド政府はサーミ人の権利を侵害しているとの判断を受けている



サーミ人の代表性と言語の多様性

- フィンランド人や他の国際的なコミュニティではなく、サーミ人自身が自分たちの立場を保証することが重要とされている。

サーミ関連教育に関する委員会

- 言語の多様性

- サーミ人の間では4つの異なる言語が存在する。（全体としては9～10と言われている）

- フィンランドでは北サーミ語が最も多く話されているが、イナリサーミ語やスコルトサーミ語の話者もいる。

- 議会や委員会ではすべての言語からメンバーを選出し、通訳を介して議論が行われる。

- フィンランド語の通訳もあり、サーミ語を習得していないサーミ人もいるため、言語の割合は固定されていない。

サーミ人の登録と投票

- 登録と投票の現状

- サーミのアイデンティティを持つ人は推定で1万人いるが、登録しているのは6000人程度。

- 投票権以外の権利

- 投票権以外に特別な権利は伴わず、サーミ語に関する権利は特にない。

アイヌとの比較

- 北海道では、アイヌの人々が結婚や就職で差別を受けることがある。

- アイヌ協会に登録し、就学資金の援助などが受けられる。

- サーミ人への支援

- サーミ人に対する支援のあり方についての具体的な情報は提供されていない。



サーミ人の政治参加と権利

- サーミ人を対象とした議席の少数民族枠は存在しない。

- 国会議員200名のうち、サーミ人議会の有権者リストに名前を公言しているのは1名のみ。

- サーミ議会から国会議員を任命する提案はあるが、実現には至っていない。

- 地方自治体におけるサーミ人の影響

- サーミ人が居住する自治体は4つあり、地方議会にもサーミ人議員が存在する。

- 特にウツヨキではサーミ人が過半数を超えているが、他の自治体では少数派。

- 地方議会でもサーミ人の権利回復や教育政策について議論されることがある。

教育と言語の重要性

- サーミ人にとって重要なサービス
 - 言語と教育がサーミ人にとって重要であり、幼児教育や若者への教育に力を入れている。
 - イナリの自治体でもサーミ語教育を推進している。



有権者年齢と選挙権

- フィンランドにおける選挙権年齢
 - 現在、選挙権は18歳からであり、18歳になると有権者リストに申請可能。
 - フィンランドでは選挙権年齢を16歳に引き下げるべきかどうかの議論が行われているが、実現には至っていない。

歴史的背景と権利の変遷

- フィンランドの法律とサーミ人の権利
 - フィンランドの法律が施行される以前は、サーミ人は自由に漁業権などを行っていた。



フィンランドにおけるサーミ人の権利と司法の動向

- 地方裁判所での漁業権に関する審理
 - フィンランド憲法を根拠に、サーミ人の漁業権が地方裁判所で審理されている。
 - 漁業関連の権利が大きなトピックとなっている。
- 最高裁判所でのケース
 - フィンランド憲法に基づくサーミ人の漁業優先権が議論された。
 - 憲法委員会では、憲法上の保護がない集団に対しても制限を課してはならないとの判断が下された。
 - 漁業権は地域的なものであり、必ずしもサーミ人に限定されるものではない。

「真実と和解のプロセス」（委員会）

- 構成と活動
 - 5人で構成され、3人の代表者とフィンランド政府が選んだ代表者が含まれる。
 - 地域を巡回し、コミュニティの人々からヒアリングを行い、経験を聞く。
- フィンランド政府の提案

- サーミ人議会の立場として、フィンランド政府へも提案を行うが、法律上の義務事項ではない。

サーミ人の教育と社会的影響

- 寮生活と教育の影響

- 全寮制の学校での生活を強いられ、自分の言葉を話すことが禁じられていた。
- いじめの経験や、サーミ人であることを恥じるような教育を受けた。
- これが現在のサーミ人コミュニティに大きなトラウマを残している。

- 社会の反発と権利主張

- フィンランドでもサーミ人以外からの（厚遇という）反発がある。
- 訴訟を通じた権利主張が行われている。
- サーミ人議会法の改正が進展しないことは反発の例。

北海道のアイヌ民族との比較



- アイヌ民族の権利主張と社会の反発

- アイヌ民族も権利主張に対する社会の反発がある。
- フィンランドのサーミ人と似た状況が見られる。

【スウェーデンの経済と社会の課題】 (2025-03-28) (行程⑤)

スウェーデンの概要説明の中で、経済と社会に関する様々な課題が取り上げられた。主なトピックには、トランプ氏の25%関税がスウェーデンに与える影響、テスラの販売減少、労働紛争、スウェーデンの選挙制度、移民に関する諸問題など。

- > 2023年からスウェーデンでのテスラの新車登録が減少。
- > イーロン・マスク氏に対する反感が影響している。
- > テスラは労働協約を結ばない方針。
- > スウェーデンの労働組合が反発し、紛争が続いている。

サマータイム

- > サマータイムは3月の最終日曜日に開始され、時計を1時間進める必要がある。(行程の最終日)

スウェーデンの人口と移民

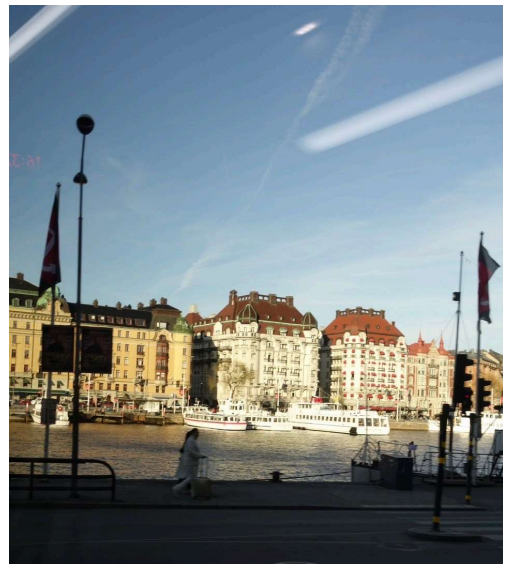
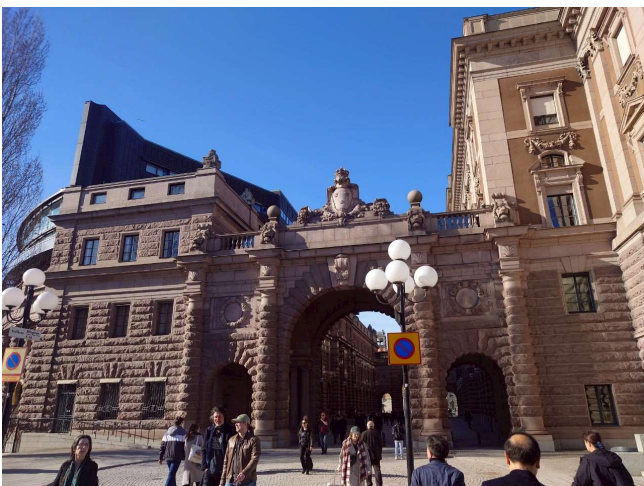
- > スウェーデンの人口は約1000万人で、移民が17%を占める。

スウェーデンの選挙制度

- > スウェーデンの選挙は比例代表制で、次の選挙は2026年9月に予定されている。

スウェーデンの政治と社会

- * 国会議員の約45%が女性であり、女性の社会進出が進んでいる。
- * スウェーデンは北欧で最も遅く女性首相が誕生したが、短期間で退任した。
- * ストックホルム市内の人口は約100万人で、賃貸物件の取得が難しい。
- * ストックホルムの地下鉄は100駅あり、各駅に芸術作品が展示されている。



【スウェーデン国会】（2025-03-28）

スウェーデン国会議員のボリアナ氏に対応いただき、スウェーデンにおけるジェンダー平等、政治参加、選挙制度、議会の運営などについての議論。スウェーデンのジェンダー平等に関連する育児制度、若者の政治参加、選挙制度の違い、議会の文化と運営などにも言及された。



ジェンダー平等とクォーター制の議論

- > 法的な義務としてのクォーター制は導入されていないが、政党による自主的な取り組みとして男女のバランスが取れている。（2010年当時、男性議員の数は女性議員より2人多いだけだったが、現在は少し悪化。）
- > その背景として育児制度の充実が挙げられる。
- > 教育や家庭生活において男女に同じ機会を与えられている。

育児制度の特徴

- > 充実した保育制度があり、1週間に8～10時間、月額約1600スウェーデンクローナKr（約25,000円）で利用可能。
- > 保育園では1人の教員に対して5～6人の子どもが担当され、質の高い教育が提供されている。

- > 失業中や休職中の親でも週に20時間まで子どもを預けることが可能。
- > 子どもたちが友達と交流を保ち、社会的なスキルを高める場としても機能。



スウェーデンの家族観と労働市場

- 家族観の変化

- > 1950年代から女性が労働市場に参入し、男女の賃金平等が進んだ。
- > 大学教育では女性の方が多く、経済的に自立している女性が増加。
- > 育児休暇は男女平等に取得可能で、男性が育児休暇を取る家庭は離婚率が低い。
- > 離婚率は高く、2組に1組が離婚するが、女性が経済的に自立しているため問題視されない。
- > 中東や北アフリカからの移民女性の労働

市場参入が政治的課題。

- > スウェーデンの人口の約10%が社会保障に依存しており、その多くは移民とその家族。
- > 移民女性の労働市場参入が重要な課題。

政治への関心

- > ボリアナ議員について政治に興味を持った経緯についての質問があった。
- > 22歳でスウェーデンに移住。当時のブルガリアは共産圏。
- > スウェーデン人は共産主義を理想と考える人が多かったが、共産主義が理想的なシステムではないことを伝える使命感を持った。
- > 穏健党を選んだ理由は、反共産主義の立場である事から選択した。

政治への関心と参加

- > スウェーデンでの政党参加
- > 政党に参加するのは簡単で、200Kr（約3,000円）で黨員になれる。
- > 黨員は様々な会議に参加し、意見を述べる事が可能。

若者の政治参加と意識向上

- > 政治キャンプと対話の重要性
 - 選挙時に大学で政治キャンプが行われ、政党の人々が若者と直接対話することが一般的。
 - 若者の意見表明や政治参加に関するアドバイスが求められている。
- > 青年部の活動と資金援助
 - 各政党には青年部があり、学校訪問や大学訪問を通じて若者に政治への関心を持たせる活動を行っている。

- 国からの補助金を利用して、会議やセミナー、勉強会、会食などの活動が行われている。
- 若者同士が互いに呼び込むことが効果的であるとされる。

選挙権と被選挙権

- > 選挙権と被選挙権が18歳からだが、経験不足を懸念する声もある。
- > 投票率と選挙教育
 - スウェーデンでは90%近くの投票率を誇るが、日本では低い。
 - スウェーデンでは選挙の1年前から学校訪問や模擬投票を行い、選挙を促進。
 - 家族で投票に行く伝統があり、民主主義の権利と義務としての意識が浸透している。



投票制度と海外投票

- 事前投票と海外投票の制度
 - スウェーデンでは投票日の3週間前から事前投票が可能。
 - 海外在住のスウェーデン人も10年間は無条件で投票権がある。

選挙の頻度と日程

- > 通常は4年ごとに選挙が行われるが、特別な事情があれば臨時選挙も可能。
- > 国会選挙、地域選挙、地方自治体選挙が同日に行われる。
 - 国会選挙が他の選挙を覆い隠すという批判がある一方で、投票率全体の高さの要因ともされている。



政治家になるための過程と費用

- > 政治家になるためには多くのボランティア活動が必要。
- > ボリアナ議員は、1997年からボランティアとして活動を始め、選挙時には個人で費用を負担して情報を送付。
- > スウェーデンの国会議員の報酬は76,000Kr（約118万円）。地方自治体の役人よりも低い給与である。
- > 年報酬はその12か月、912,000Kr（約1,400万円）。ボーナスは無し。

女性議員の割合とジェンダー平等

- > 北海道議会では100人中17人が女性であり、ジェンダー平等の促進が必要とされている。
- > 女性のネットワークの重要性や、家事育児の両立の必要性が強調された。

教育問題と議会制度

- スウェーデンの議会制度の変遷
 - 1981年までは二院制であったが、現在は一院制に移行している。
 - より民主的な制度を目指しての変更であった。



【在スウェーデン日本国大使館】 (2025-03-28)

スウェーデンと日本の関係、スウェーデンの人口と経済規模、デジタル化の状況、物価上昇率と失業率、議会制度、ICT教育の重要性、社会福祉制度、選挙制度、GDPと国家予算、成長率についての概要説明。

スウェーデンの技術と防衛産業、グリーンエネルギー政策、日系企業のプレゼンス、ユニコーンスタートアップ、教育とデジタル教科書の現状、移民政策、6G研究の重要性など、多岐にわたるトピックが取り上げられた。



##概要

- > スウェーデンの人口は1000万人超、北欧五カ国の中で最も大きな経済規模を持つ。
(ノルウェー、デンマーク、フィンランドの人口は500万人程度。)
- > デジタル化は社会全体で進行中。
- > 物価上昇率は一昨年度8.5%で、失業率は7.7%。
- > 社会福祉制度が充実しているため、失業率が高め。
- > 議会は一院制で、349名で構成。
- > ICT教育は今後の教育において重要な役割を果たす。
- > NATO（軍事同盟）に加盟。中立国政策から200年ぶりの大転換。

- > 男女共同参画が日本よりも進んでおり、女性国会議員の割合は46.4%である。
- > 女性管理職の割合は42.9%である。

スウェーデンの技術と産業等



- > イノベーションランキングで世界第2位、国際競争力ランキングで8位。
- > 多様な産業分野でグローバル企業が存在。（通信・エリクソン、製薬・アストラゼネカなど）
- > 国内消費電力の99%以上がクリーンエネルギー（水力、原子力、風力が主）

スウェーデンと日本の経済的関係

- > 日立製作所がABBの送電網部門を買収。

スウェーデンにおける日系企業のプレゼンス

ゼンス

- > スウェーデンには多くの日系企業が進出しており、駐在員を送らずに現地の文化を尊重する経営を行っている。

スウェーデンのユニコーンスタートアップ

- > ユニコーンスタートアップ（市場価値が1000億円超）が誕生。（スポティファイやマインクラフトのモヤンスタジオが有名。）

スウェーデンの教育とデジタル教科書の現状

- > スウェーデンではデジタル教科書の導入が進んでいるが、五感を使った学習の重要性も認識されている。

要点

- * デジタル教科書には利点と欠点がある。
- * 五感を使った学習が重要視されている。
- > 学校ではデジタルと紙の教材が半々で使用されているが、これは意図的なものではなく、教育の適切性を考慮した結果である。
- > デジタルツールは障害のある子どもにとって有利であり、教育の平等性を高める。
 - * 障害のある子どもに有利
 - * 教育の平等性を高める

デジタル化に対する政府の方針

> 政府はデジタル化を加速させない方針を持っており、デジタル化に関する研究の引用が不適切であると指摘されている。

スウェーデンの移民政策

> スウェーデンの移民政策は厳しく、税金を納めない移民には厳しい態度を取っている。

* 移民は社会に貢献することが求められる。

* スウェーデン語の教育は必須。

ボトムアップ型と特段型の研究室

> ボトムアップ型は研究者の自由な発想に基づき、基礎研究でも応用研究でも自由に行える。特段型は政府が特定の分野に優先的に資金を提供する研究。

6G研究の重要性

> 6G研究は現在のトップ優先事項であり、大学や国立研究所に優先的に資金が配分される。

デジタル化の重要性とその影響

> デジタル化は持続可能な福祉社会の実現に不可欠であり、財政的な効率化を図るために重要である。

スウェーデンのデジタル化の歴史と現状

> 1947年にパーソナルナンバーが導入。1960年代に電子化。1991年に国税庁に移管。

モバイルバンクIDの普及とその影響

> モバイルバンクID（スマホで利用可能）はスウェーデンで広く普及しており、18歳から65歳の99.2%が使用している。

スウェーデンの核シェルター

> スウェーデンでは法律で核シェルターの整備が義務化されており、48時間以内に機能を果たせるように準備されている。



ストックホルムのアートな地下鉄ホーム

【語学学習支援を行うスタートアップ企業訪問】 行程⑥ (2025-03-30)



非営利組織「broke craft」および国際基盤Foundation「link」が中心となり、デジタルメディアを活用した移民や難民への言語学習支援の取り組みについて説明を受けた。

スマートフォンアプリやテレビ、ラジオ、その他のメディアとの連携、字幕の活用、さらには各国の文化に配慮したカスタマイズ事例が紹介され、実務上の成功例や協力体制についても議論されました。



要点

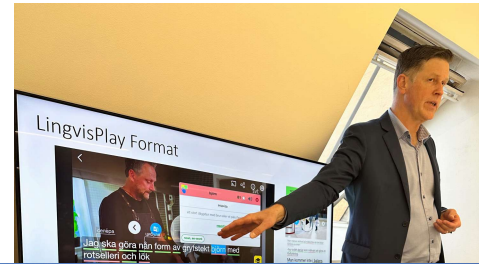
1. 非営利組織「broke craft」と国際的な活動のために設立されたFoundation「link」についての説明
2. デジタルメディアを活用した言語学習支援の取り組み（link display）と、その狙いは移民や難民がスウェーデン社会へ円滑に参加できるよう支援すること
3. 授業内でのデジタルソリューションとメディア利用による言語学習の事例とその具体的な展開

4. 講師自身の留学経験、特に北海道および札幌、東海大学への留学エピソードとそれがキャリアに与えた影響
5. ユネスコ主催の会議でのプレゼンテーション内容と、メディア（テレビ、ラジオ）を用いた言語学習法の議論

アプリ開発

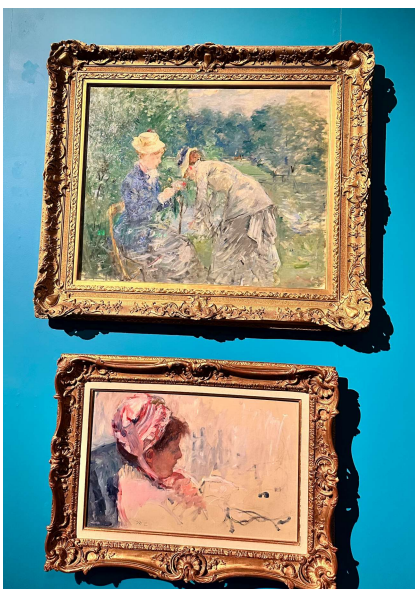
> スウェーデンにおける難民の流入（2015年のシリア難民危機）に対応するため、スマートフォンを活用した支援策の開発。

> 公共放送SVTとの契約やヨーロッパ放送協会賞の受



賞

> スマートフォンを活用した言語学習アプリは、24時間、どこでも学習できる手軽さ、無料が普及の要因。



> 字幕やキャプションを活用した言語学習

> テレビ放送以外にも、新聞記事やポッドキャストなど様々なメディアに応用可能

> ユーザーの実際の視聴・読書体験に基づくパーソナルプロファイルの生成

> 公共放送とのパートナーシップによる資金調達の仕組み

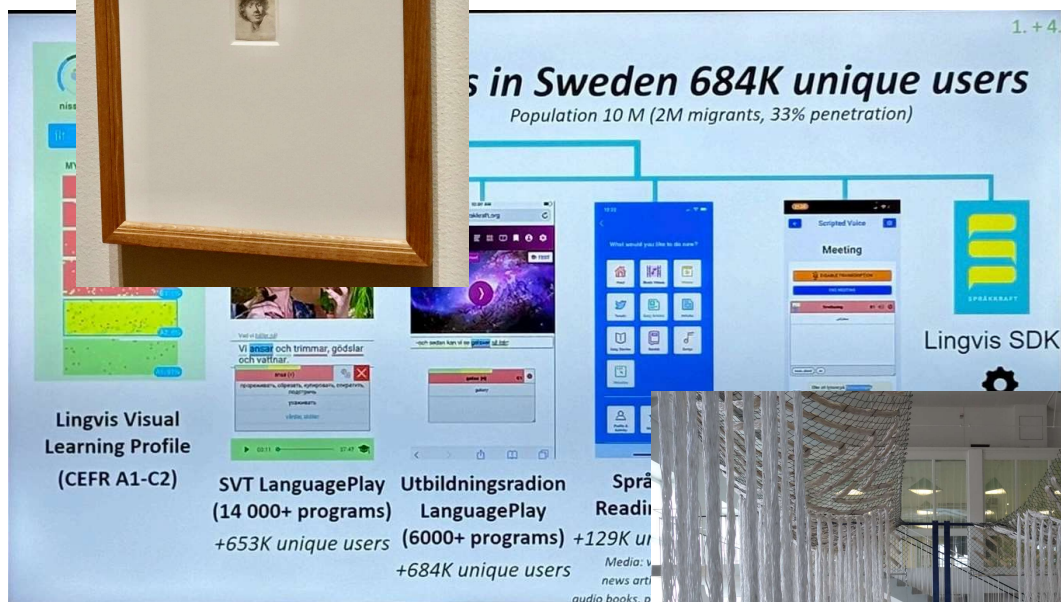
多文化・多言語環境における言語学習の支援

> ウクライナや日本など、異なる文化と言語を持つ国々で移民や避難者に対する言語学習支援としての役割を担う。

> ウクライナ公共放送の協力により、寄付金を活用してウ



クライナ語学習ツールが無料提供されている
 > 日本においては、移民増加と日本語教育不足を補う
 ため、デジタルソリューションとしての応用が検討され
 ている



【ストックホルム近代美術館】 行程⑥ (2025-3-30)

北海道立近代美術館のリニューアルに関する検討が行われていることから、スウェーデンストックホルムにおける美術館についての調査

ストックホルムには、ストックホルム近代美術館、スウェーデン国立美術館、フォトグラフィスカ、ディールスカ・ギャラリー、プリンス・ユージン・ヴァルデマルスッデ、スヴェン・ハリー美術館などが存在している。

ストックホルム近代美術館は、国立の美術館として1958年開館。20世紀から現代に至るまでのスウェーデン及び国際的な現代美術のコレクションを所蔵している。

サルバトーレ・ダリ、パブロ・ピカソ、アンリ・マティス、などの作品も展示されている。 スtockホルム近代美術館

特別展では、ジェンダー平等にかかわる「母性」を女性固有のものとしらない主張のある写真やインスタレーションの展示が行われていた。映像も含めた現代アートが基本的にスウェーデンの作家のものを中心に、展示をされていた。





北海道立近代美術館は、「明治以後の北海道美術の流れから、各分野のすぐれた作品を系統的に収集・保存、また、国内外の近代以後の作品、特にガラス工芸、パスキンを中心とするエコール・ド・パリの作品などを積極的に収集している。」とされているが、道立近代美術館と、ストックホルム近代美術館で、同じ近代美術館の呼称でも「近代」の意味が異なるような印象を受けた。

「海外調査総括座談会」

(発言者を特定せず〇〇で表示)

〇〇：皆様、今日はお忙しい中、お集まりくださりありがとうございます。日程が合わず全員が揃うことが難しくこのような形になってしまいましたが、今回の調査を振り返って、今後の議会活動に活かすために個々の感想や課題をまとめていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、特段テーマは絞りませんが、どなたか口火を切っていただけると助かりますが・・・



〇〇：私は、公共交通にいたく感動しました。合理的だなあと。フィンランドで乗った電車はいわゆる国鉄（国有）の電車ですよね。それなのに駅員さんが一人も見当たらず、人件費の面で大幅な削減がなされているようで、とても合理的だなと思いました。

〇〇：どうやってただ乗りをチェックするのかな？と不思議に思いましたね。無銭乗車の場合100ユーロの罰金だと聞きましたが、まず、どうやって「確認」をするかが疑問でした。

〇〇：抜き打ち検査はするようですが、「性善説」に基づいているのでしょうか～

〇〇：道路からそのままホーム行って乗車が可能で、路面電車に乗るのと同じ感覚で列車に乗ってましたね。しかもあの一日券のチケットでエリア内であればバス降りて電車に乗れる。並行で走ってるから、そのまま乗りましたね。フィンランド方式だったら、エスコンフィールドの前にすぐ駅できると思うんですね。改札なんか通らないで。街の中へすぐ入っていただけます。

〇〇：あれだけ移民が多くいて、悪いことしてる人が沢山いる様な話も聞くけれど、そうでもないんですね。

〇〇：チケット買わなくても乗れちゃう。でもカードが無い人は大変ですね。ガイドさんの話だとそういう人はみんな現金を。普段貯金もないので、あの100ユーロというのは結構払うの大変なんですね。

〇〇：道路向かいの図書館から帰りにそのまま列車に乗るのに、チケットどこで買うんだろうと思ったんですよ。

〇〇：券売機なかったですね。



〇〇：券売機もないし、チェックする機械もなかった。Suicaみたいなもの持ってんだから。常にプリペイドみたいなものがあるのかな。

〇〇：タッチする機械もないですね。地下鉄あたりで、最初に入る時だけチェックイン。

〇〇：そうですね。地下鉄だけはありません。一日地下鉄券。地下鉄との共通。スウェーデンは時間単位で買えますよね。スウェーデンは75分間乗るときだけクレジットカードで支払う。スウェーデンは改札はありました。

〇〇：トラムに乗った時は何もなくて「お金払ってないの？このまま乗ってたら、もしかして降りれる？」みたいな話してたら、いつの間にか車掌さんがスルーって来て、「あの～こんにちわ！」みたいな感じで、端末持って『ピッ』としましたね。

〇〇：結構混んでたんですけど、お客さんの間をこう縫うようにニコニコして、外国人が来て、観光客見つけたぞ、みたいな感じでした。普通のクレジットカードなんですよ。なんでもあのタッチであれする。クレジットカードで。

〇〇：日本のタッチと同じですか？

〇〇：そうです。タッチ決済。地下鉄も一緒ですね。

〇〇：もちろん現地の通貨決済だと思います。で、あと請求くるっていうシステム。水上バスも乗ったんですが、それもバスもタッチで普通にクレジット。ものすごい便利です。

〇〇：一枚でクレジットカードだけで全部できるよって聞いてはいたけど、外国人も移民もクレジットカード作らなければ、暮らしていけないような感じですね。

〇〇：人が移動する情報とか、人の動線とかは全部カードの情報で把握されてるから、多分その情報を高く売ってるかもしれない。そしてそれによって人の行動が分析される。カード会社へ情報が蓄積されるのですね。



〇〇：サピカみたいにガラパゴス化しても困るけれど、北海道として今後のITの活用に関しても検討が必須ですね。

〇〇：話はずれちゃうんですけども、Suicaから離脱していくことが増えていて、最近、札幌市内でも交通系プリペイドでもクレジットカードでも使える改札ができてますね。

〇〇：交通系ICは更新費用がものすごくかかる事から、クレジットへ移行する流れがあ

り、外国人観光客にも良いらしいです。

〇〇：日本ではいろんな種類の決済方法があって小売店が困るようです。様々な決済に対応するのは大変で使えるものとそうで無いものが混在している状態。その中でも徐々に「PayPay」に収斂されつつあるような気がします。結局手数料の問題があって、いまだにキャッシュオンリーというお店も見かけます。

〇〇：決済が一か月遅れるのと手数料の問題が小売店にしわ寄せになってしまってます。

〇〇：カード会社だけ儲けるんじゃないくて、手数料を下げればもっとキャッシュレス社会になるんだろうけど。例えば手数料が1%ぐらいまで下げれるなら普及は進むでしょうね。フィンランドは、その手数料を国が負担しているようなことを聞きました。

〇〇：コロナ前に計画していた調査では、ヘルシンキでのMaaSを検証しようという計画だったのですが、最近日本でも十勝などで実証実験を行なっているようなので、計画から外したという経緯があります。結局は、ほんの一部ですが、事実上の体験ができたというわけですね。

〇〇：ところで、そのフィンランドの交通ってというのは、民間の会社があってやってるのか、それとも公共として運営しているのでしょうか？

〇〇：公共ですね。十数年前に行った時は、全て公営だったんですよ。でも役所っぽくないんですよ。社会保険庁とかにインタビューに行った時も、あの「カスタマー」っていう言い方してたんで・・・「お客様」っていう。

〇〇：なるほどね。なんかちょっと発想が違う。上下分離とかもあるのでしょうかね。経営がそれぞれじゃないから、ああいうことが一括してできちゃうのかなっていう。

〇〇：スウェーデン、国営じゃなくても民間でもその国営のやり方に準じている。私も詳しくはわからないのでちゃんと調べてみます。鉄路は高速化を断念して維持を優先したという経緯があります。新幹線を買うとかはやめたんですよ。中国から買うか、日本から買うかって。結局、鉄路の維持のために高速化じゃない方向にしたんです。

〇〇：北部は人が少なく人口密度が低い。その中の鉄路維持と高速化の選択・・・

〇〇：フィンランド北部と北海道の環境比較、そして鉄路の維持。質問してもいいかもしれないですね。

〇〇：なんでも民営が良いとはならない。医療、あの医師派遣などもそうですね。

〇〇：キリスト教社会主義がそうさせていると思うのです。ほとんど公営化。日本だったら民間が運営しているので、医療機関など統一が取れない。学校もそうで私立（民営）と公立の競争みたいなことになっちゃってるし、どっちが良いとは言えないけれど・・・



〇〇：今回の調査の全体を振り返って思い浮かんだ言葉が「幸福度」だったんです。訪れた二つの国は幸福度が世界の中でもいつも上位ランクにいるわけですが、この要因はなんだろう・と考えたんです。それも、選挙の投票率が高いところと関連づけたのです。投票率が高いということは、自分で国をなんとかしたいという「能動的」な発想と、「幸福度」は繋がっているのではないかと思ったんです。

〇〇：確かスウェーデンでは国政も地方も同一選挙だそうですね。全国的な行事なわけですから、自ずと関心を持つ。盛り上がる。結果として投票率が上がる・・・

〇〇：比例代表制だから党にしか投票しない。地方議員も地方も全部そうだと思います。そして事務所もいない、秘書もいない。だからお金はかからない。報酬は公務員並み。

〇〇：国会議員に選ばれる人はどういう人なのかなと考えたことがあります。以前、穏健



党の女性議員の方にインタビューした時に、その人は中学生ぐらいから政党に入れたっていうので、それで生徒会のノリで政党に入る人もいるらしいです。政党に入ったら地域活動をしたり、勉強会があって、その中のいろんな中から候補に選ばれていくらしい。勉強会では、他の国でどんな宗教があるかとか、かなり広範囲の勉強するそうです。あとは地域のボランティア活動などをして、そこの中から選ばれて地

方議員の名簿に乗っていく。名簿は女、男、女、男・・・となるので、自動的に男女半分かずつになるようです。

〇〇：どの政党も？まずは政党に入る？

〇〇：穏健党というふうに言ってました。社会民主党とかは違うかもしれません。

〇〇：比例であるなら、政党からの推薦になりますね。

〇〇：十年ぐらい前はその穏健党と社会民主党だけだったんですけど、今回8月に来道される方々は五つか六つくらい政党からになるようです。

〇〇：スウェーデンもやっぱり極右みたいな人が現れ、分断や排斥の流れが生まれていますね。

〇〇：それは世界的な傾向ですね。

〇〇：8月のスウェーデン国会議員との懇談では、ジェンダー平等のことと若者の政治参画の二つテーマを置こうと思っているのですが、日本のジェンダー平等と若者の政治参画の実践報告みたいな人を誰かにお話しいただいて、意見交換してみたいと考えています。

〇〇：ボリアナ議員が説明してたのは、家族でいつも選挙の前に会話をするような習慣があって、子供の時から政治には関心持ってるなって感じました。それから18歳から非選挙権があるのは日本とは大きな違いですね。



〇〇：日本でやったら大問題になるかもしれない。学校の

模擬投票では日本だと。例えば函館では、沖田総司を選ぶか、高杉晋作を選ぶかみたいな模擬投票なんだけど、スウェーデンでは本当の候補者の模擬投票やるんですね。

〇〇：いま学校の児童会選挙とかはあまり選挙がないんですね。互選みたいな形が多いんです。選挙があったとしても、自分のクラスから候補者を出たら全員みんなを応援するっていう前提だから、言ってみれば出来レースです。他の候補者に投票しても良いルールなのに、同調圧力みたいなものが働いています。

〇〇：指導があるわけじゃないでしょ。

〇〇：無いです。選挙管理委員会の子供たちで選挙期間はとか、立会演説会のルールとか全部決めるんです。ポスターは画用紙何枚分、貼っていい場所、選挙期間はいつまでだから、朝のあの登校時間の時に「何年何組、会長候補の誰々です。よろしくお願いします。」とかやるんです。でも自分の学級の票読みはできてしまう。ところが結果の票数が足りなかったりすると「裏切った奴がいる」という話になってしまう。

〇〇：どこかで聞いた様な「党議拘束」がかけられているような状況です。同調圧力ですね。それを先生もそういうもんだって教えちゃう。「みんなが応援するもんだ。」ってね。それで「選挙に行こう。」って、あんま思わないですよ。自分の意思で「選べる」という感覚がないんだと思います。日本の子どもはそのような経験だから、18歳になって投票権が与えられてもあんまりピンとこないのかもしれないですね。

〇〇：さっきの話にあった被選挙権があったらどうなんだろう？自分と同じ世代がこうなれるんだって思ったら違ってくるのかもしれないですね。自分が何かをしたら何かが変わるっていう実感みたいなのが、もしかしたら日本は少ないのかなと思っています。成功体験でしょうか。

〇〇：私、あの核シェルターの話思い出します。地元で、景気対策するより核シェルター作ったらどうですかって聞くと、「核戦争起きたら終わりでしょう」という反応がすごく多いんですよ。

〇〇：だけど、フィンランドとかスウェーデンの人は、例え核戦争が起きたとしても、自分たちは生きてなんとかしようと思ってる。右か左かじゃなく本当にリアルにロシアと国境を接していて、核戦争の脅威があるからリアルなんだと思います。

〇〇：日本も、例えば津波防災の発想ではリアル感がある様にも思いますね。

〇〇：自分で判断できる人多いなとも思います。一方で他人もすごい尊重する。あの図書館でひっくり返って、何しようがそれを咎めるわけでもなく、自由に過ごしていましたね。



〇〇：そういう意味では札幌の高校生とかは居場所ないんですよ。フードコートも、地下街も閉め出されちゃったし、スケボーしちゃいけないし。

〇〇：あの、ちょっとデッドスペースみたいとかあって。そこで鏡見ながら踊っていたんだけど、それもダメってなって。とにかくたむろしたらダメみたいな感じになってしまって、居場所が無いらしいです。

〇〇：フィンランドやスウェーデンでは、みんな自由に座ったりできる場所があって。公共的に節度が保たれてましたけどね。日本でやったら、どうなんでしょうね。

〇〇：若者の居場所ってというのはあんまりないように思います。図書館から追い出され、フードコートから追い出され。

〇〇：図書館はどういう状況なんでしょうね。

〇〇：勉強しちゃいけない。喋っちゃいけない・・・喋っちゃいけないのはわかるけど。勉強もダメなんだわ。長い間いちゃいけないみたいになってるんです。

〇〇：たむろすることがダメという。

〇〇：それ、発想が全然違うんですね。

〇〇：だから、おじいちゃんしかいないよ。

〇〇：確かに、そうですね・・・地域の図書館。静かにただただ図書を読むという感じで、あんまり積極的に利用するという習慣が無かったなあ・・・

〇〇：そうなんです。地方の方が公設の塾とか高校も使えるんですけど、札幌の高校だと、生徒も多くて狭いスペースで勉強しなければならない。創成スクエアにはそういう場所がある様ですが、いつもいっぱいみたいです。

〇〇：スターバックスでは、よく学生が勉強して



ますね。でも2時間ぐらいにしてくださいと言われますね。

〇〇：生きづらいな・・・若者の居場所がないんだね・・・

〇〇：そのフィンランドの場合、くつろげて好きなこととして良いついていう感じ。ゲームしたり、多用途で、みんなが集まってくるところに図書館があるのか、図書館にみんなが集まってもいいよっていう感じのコンセプトなのか・・・

〇〇：コンパクトシティっていうと、日本だと遠くに住んでるお年寄りをどっかに一つに集めましょうという感じですけど、そもそも北欧とかで始まったコンパクトシティって、高校とか病院とかは駅の側に必ずあるんですよ。そういう意味の機能を集約して、そこに人が賑わいを作るっていう感じなんですけど、私もあの道立高校の配置計画について検証すると、どうしてあんなところと思うことがあります。駅から歩いていけないような距離感の場所にあたりします。将来、クルマも運転できなくなるんだし。

〇〇：なるほどね。離れたところばっかですね。

〇〇：それでバスをどうするか？その為に公費を投じる。病院も遠いし、コンパクトシティの意味が違うんだわ。

〇〇：ヨーロッパは歴史的に城壁に囲まれて、外敵から地域を守るという発想があるのでしょうか。日本とは環境が全然違うんだよね。でも。これからの高齢社会なら、徒歩で生活が成り立つ様なまちづくりが必要かもしれない。地方創生の考え方にもそれがあるのだと思う。

〇〇：昔の都市国家がそうで、街の中に住んでて畑に通うっていうスタイル。やっぱり、もう1回行かなきゃダメですね。

〇〇：話は変わるけれど、サーミ人への支援に関してですが、日本の場合はアイヌ民族に対して就学援助があるんですよ。それに対して逆差別とか厚遇だというふうに言う人もいます。一方でフィンランドの場合は生活支援は無いけれど、サーミ語の保存を国が保証して

いる。人材育成とか教材費は国が全部保証するというふうに言っていましたね。

〇〇：日本で言えば、そのアイヌ語をどうやって保存していくかっていうのが、そこがもうまるっきり違うと思うんですよね。ハワイでも同じことがあったんです。ハワイの文化を残すのに言語保存は絶対条件だからと言われました。

〇〇：今、アイヌ語の話者が



減ってってるから、今のうちになんとかしなければならない。アイヌ語を喋れた人もかなりいなくなっちゃってるので、早急にやらなきゃならないと感じています。

〇〇：平取では頑張ってる。でも総合学習の時間などでやっている程度で、教材なんかも自分たちの手作りだし。公的な支援の下にやらなければダメだと思う。それともう一つは、選挙に選ばれた議会。議会の権限は別としても、民族を代表するという組織。そこで意見集約を図り民俗を代表すると言う位置付けが必要だと思うのです。

〇〇：アイヌ政策における支援について、厚遇という批判について思うのは「平等と公平」の違いが理解されていないということですね。公平な条件にするための支援なのに、逆差別だっていう意見も無くならない。

〇〇：その権利回復にはいろんな意見もちろんあるんですけど、お互い同じところに立てるような。多分僕はマジョリティの側なんですね。それで、その抱えている課題ってというのは、たくさんの側が積極的に関わっていかないとダメだよ。

〇〇：アイヌ民族の人がちゃんと学芸員さんでいたのが、白老と平取。アイヌ民族当事者の研究者がちゃんと発信していたって感じ。ウポポイでは、初めてアイヌ語を使いますみたいな人も働いてるんですけど。それに疑問を持つ人も少なからずいるのです。私としては、先を見ていいことだなと思って見ています。

〇〇：平取では「シシリムカアイヌ文化祭」っていうのをやるんですよ。そこではちっちゃい子供から大人まで、アイヌ語で歌を歌ったり、劇をやったり、ユーカラを披露しています。そこでは子どもたちは誇りを持ってやれてるんです。時代は変わったなあ～と思って見ています。

〇〇：アイヌの人たちにも過激な人もいれば、うまくやっていった方がいいっていう穏健な人もいれば、いろいろですね。

〇〇：千歳のアイヌ協会の会長が、あるシンポジウムで言ってました。例えば鮭狩猟の権利回復など反発も多いけれど、本当はみんなに理解してもらって、初めて権利が通るのだから「なんでもやみくもに権利ばかり主張しているつもりはない。」と言ってました。

〇〇：鮭の狩猟については、司法の場で判断してもらおうという考えだと思うけれど、難しい問題ですね。

〇〇：サーミ博物館での説明で、宗教が道具として使われたとの見方があり、カトリックが入ってきて、「あなたたちも同じキリスト教徒の一人です」みたいな感じで、民族を一つにしていくという流れを作ったとの説明がありましたね。アイヌに対しても同じようなことがあったわけです。

〇〇：よく文字を持たない民族が劣っているような見方も無い訳じゃないと思うけれど、よく考えたら文字を持つ民族だって他所から文字を持ってきて言語に当てはめたという例は沢山あるわけで、サーミ語にアルファベットを充てるのもそれと変わらないことになると気がつきました。

〇〇：次に、ネウボラを始めとした子育て支援などについてですが、充実した政策がとられています、その事が直接少子化対策に繋がっているのだろうかという疑問を持ちました。

〇〇：確かに大きく回復はしてないけど、1.7くらいだったと思うけれど、日本よりはだいぶ良いことは確かです。

〇〇：ところがその内訳を見ると、移民や難民の人たちが子供をつくって数字が増えているのではないかという説もあるんですね。これからの日本に置き換えて考えたとき、労働力、そして移民・・・色々と考えてしまいますね。

〇〇：労働力に関しては、日本は選ばれない国になってしまうのではないかという話もあります。

〇〇：そうなんです。働く人にとって日本語の障壁もあるので難しいと言われてます。だから日本国民を守られるんだけど・・・

〇〇：「北海道創生計画」という十年計画を立ててるところだけでも、いかに人口減少を食い止めるかっていう政策と、もう一つは減ることを前提にして、どんな社会づくりをしていくかという計画を立てようとしてるんです。20年後はあの社人研の予想どおりに進んでから、その時どうするかってことを、今からちゃんと対策をとろうという考えなんです。例えば役場はずっと縮小しちゃって、AIでやれることは任せる。現場に必要な技術っていうのは、人間でなきゃならんところが多いから、文科系の大学を卒業してね。うんで官庁に入ろうって人たちはもう職場がなくなる。医療分野でもAIによる診断が正確だということになり得る。

〇〇：そうすると、議会の質問もチャットGPT でやって、答弁もそれで出てきてという時代になってしまうのだろうか。お互いにそれを読むだけ？（笑）

〇〇：以前スウェーデンで聞いたのですが、AIの発達で、必要無くなる職業というのが数年前に出ましたけれど、そういう人たちの相談に、弁護士さんやお医者さんも含まれているそうなんです。膨大な判例から結論を導いたり、検査データを検証するという作業はAIに任せるとい時代になるのかもしれない。

〇〇：フィンランドがベーシックインカムを導入実験をして、結局は止めちゃったんですけど、ベーシックインカムやる意味はどうしても特別なケアが必要とする人が20%を必ずいるので、なんでもないやつはもう機械に任せて、人の能力をそこに集中するっていう考えもありかと思うんです。先ほどの話にあった様に、医療なんて世界中の症例や検査結果をデータ化して、診断もそこから導き出す。そんな時代が来ているのかもしれない。

〇〇：今は高校からみんな大学に行こうとしていて、しかも受験楽だから文系に行く人も多いけれど、その人たちは将来は仕事のないことになってしまうかもしれない。それより高校で技術職に繋がる教育のシステムに変えたほうがいい。

〇〇：確かにそうですね。でもまだまだ、社会がその認識になってない。色々な職業も先々ちゃんとこれで生計立てて安定していけるかどうかの見通しですよ。学校の勉強が

得意な子供ばかりでないから、人それぞれ得意な分野があるのだから、それでちゃんと暮らしていけるような社会システムであって欲しいものですね。

〇〇：これぞ多様性という考えですね。例えば子育て支援のところなんだけども、いろんなものがみんな集まってきて、様々なことを相談ができるとか体験できるとか、多様な社会を目指すっていうことの方が将来的に幅広い人間ができていくんじゃないかなと思うんだけどな。

〇〇：米騒動の話題で、全農が悪者になってしまってるけれど、決して全農が悪いわけじゃないんだよ。誰かを悪者にしたがる社会だよな。二項対立だったり。善悪を単純化すると楽だけど、そういう意味では小泉さんはなかなかうまく世論持ってきますよね、

〇〇：世論が一斉に。そこが悪いみたいな。あるからな。

〇〇：みんなそんなに米食ってたの？と思う。

〇〇：そうなんです。今まで米離れだって言われてたのに。それが不足で大変だって言い出したら、みんなコメ、コメ、コメって。

〇〇：党首討論でさ、野田さんがね、日本人の一人当たりコメ消費量が年間35kgって、俺、ショックを受けたよ。たったそんなもんで。こんなに不足だって大騒ぎ、コメ食べる、コメ食べるってずっと言ってたのにね。給食もだいぶ減ってるんでしょう。



〇〇：一時より米飯給食という形で、ある程度は増えたようです。コストもそうだけれど、炊飯できる業者、工場がなくなっちゃってるんですよ。地方行ったら自校給食じゃないところで、ご飯だけパン屋さんをお願いして、ご飯も炊いてもらってる地域なんかもあったんですけど、それができないところも出てきちゃったりとかで、それで減ったりとかもしてるんですね。

〇〇：そっか。でも基本的には米飯給食が広まって欲しいですね。

〇〇：色々と話題はつきませんが、そろそろ予定の時間となりました。今回の海外調査派遣での様々な経験を今後の議会議論へと各自が繋げていただければと思います。本日はありがとうございました。

派遣議員による所感・主張など自由記述

(添付写真は編集者による)

北欧調査第1日目

現地時間朝6時に到着後3時間ほどの仮眠を経て、鉄道に乗り、隣のESPOON市に移動。市の総合支援センターで研修。以前ネウボラという子育て支援センターを主体に様々な支援を別々に行っていたものを一箇所に集め、妊娠から出産、子育て、生活、移住者（紛争地域などからの避難者など）の相談・支援など総合支援に対応している内容などを研修。また、途中の地下鉄ホームやこの建物にも備えられている避難シェルター、近くの日本で言う「放課後児童保育センター」、ヘルシンキの市立図書館の、オープンな市立図書館に、子どもから若者、高齢者など多くの人たちが集う様子を視察。到着1日目とは思えない中身の濃い多くの視察研修をさせていただきました。明日は北極圏イナリ市に行き、サーミという先住民族の博物館や、議会などで研修です。

北欧訪問調査二日目

午前中ヘルシンキ空港からイヴァロ空港へ向かうため飛行機に乗り込んだものの、機材故障とのことで降ろされ、別の飛行機で1時間半遅れで到着。その後イナリ村にあるサーミ族の博物館に行きました。閉館まで時間のない中、学芸員の方が丁寧に対応してくれて、お話を聴くことが出来ました。一口にサーミ族と言っても、「スコルト（東方）」「イナリ」「ノース」の3つの言語系統に分かれており、それは方言というよりは別の言語と言うほどの違いがあること。ロシア、フィンランド、ノルウェーの3カ国に広く居住していること。フィンランドのサーミ族も、国が120年程前に独立してから徐々にフィンランド人が入ってきて居住地が奪われていったこと。第二次大戦の時、ドイツ軍により、南へ移動させられ、終戦後ドイツ軍が引き上げる際、殆どの家は焼かれていたことなどを教えてくれました。この博物館は1959年に小さな家を建てて、残っていた資料を収集し始め、その後議会の開設もあって今の形にまで進めることが出来たとのこと。議会などについては明日の朝訪問して聞かせていただく事にしています。

北欧調査研修三日目

今朝は朝八時にホテルを出発し、サヨスにあるサーミ文化センターを訪問。9時から議会で議会の成り立ちや位置付け、等などについて説明を受けました。この議会は文化的な自治組織として国との接点の役割を持ち、1973年自治組織として発足したものを基盤に1996年に正式に設置しました。サーミ自身の法律がありフィンランド憲法で権利と文化的な位置づけが保障されており、議会は法的な協議を行い、文化、社会保障、保健、教育などについて、完全に独自の決定でなく国への影響力を行使する機関として存在しています。年5回の議会で予算などの審議、教育・保健福祉・教育・経済・法律などの専門委員会があり、選挙は四年にいちど、選挙権資格はラップ人として申請をし、最終的には最高裁が決定する。最も大事なことは議会が自身のこととして決定していく、漁業権などの権利や、子どもの差別などの問題は北海道同様に存在している。憲法判断は制限を課しては

ならないとされているなどとされているが、新しい権利訴訟に対する反発がサーミ法の改正が進まない理由にもなっている。などを聴くことが出来ました。

話は別ですが、昨日も機材故障で乗り換えて時間がロスしましたが、今日はヘルシンキに飛ぶ筈の便がストライキのため欠航となり、移動ができなくなることが分かり、昨夜から現地通訳や、団長が旅行会社等との連絡調整などで寝られない時間を過ごしました。今日になってようやく明日（28日）朝出発して途中地方路線を乗り継ぎ、ヘルシンキ経由でストックホルムに行くことに成りました。予定は大きく狂います。

調査四日目

今日は原則移動日でしたが、フィンエアーのストライキのため移動が出来ず、サヨスで一日過ごすことになりました。サヨスはラップランドという日本でも有名な観光地で、多くのホテル群があり、スキーとオーロラ観光のために多くの外国人観光客が押し寄せて来るところです。いくつかのレストランや、土産物店、アウトドア用品店などがあり、そこを散策しましたが、説明はフィンランド語か英語で書かれており、さっぱり解りませんでした。同行した仲間から、翻訳ソフトのカメラ機能を使うとスマホの中で翻訳してくれることを教わり、こんな便利な機能が有るのだと知りました。（これも研修になった？）

因みに副次的に期待して居たオーロラは一泊伸びたにも拘わらず曇りから雪となり果たせませんでした。（もう一度観光に来いというサイン？）

調査五日目

昨日のストライキのため、一日移動が遅れましたが、ようやくロヴァニエミ経由便が取れ、ヘルシンキ経由でスエーデンのストックホルムに着くことが出来ました。ロヴァニエミはフィンランドの北極圏ラップランド地域の南端にありますが、オーロラ観賞やスキー観光客が多く訪れるようで、イヴァロ空港を飛び立って一旦ロヴァニエミ空港に着陸し、そこで降りる客とヘルシンキに行く客が入れ替わりと言う列車のような経由便でした。

ストックホルム到着後、直ちに国会議事堂に行き、その会議室でスエーデン・日本友好議員連盟会長の出迎えを受け、スエーデンの国会についての説明を受けました。

スエーデン議会は一院制であり、男女議員の均衡のための制度はないが、実際にはほぼ半々で、これは子どものケアが一ヶ月3万円以内で保障されている事とも関係している。

- ・保育園は教員一人当たり5人程度の子どもを受け持ち、親が休暇中でも週20時間は預けられること、1家庭あたりの子どもが1～2人なのでここで子どもの社会性を育める。スエーデンがこの様に女性の社会進出が進んだのは女性が労働市場に進出するようになった1950年頃からで、その頃から男女の賃金は同じ、大学生は女性のほうが多く、所得も多くなったせいでもある。

- ・育児休暇は男女平等にとる事になっており、男性が取得する方が離婚も少ないとのこと。ただし、離婚も二組中一組位有るが、女性が離婚しても生活していけることも理由のようです。

- ・政治的課題としては、この国も移民が多く、移民の家族では女性が働いていないことがあり、どうやって労働市場に出てもらうかが課題となっているとのこと。またそのためも有って、スエーデンの1000万人口の10%位が生活保護を受けており、その多くが移民と

その親族となっており、それに対する国民の反発が、選挙で保守政党が多数を占めるようになっているというのは、ヨーロッパ全体の傾向と同じと言うことです。

- ・スウェーデンでも18歳から選挙権と被選挙権が与えられており、普段から家族も一緒になって政治を議論する習慣があり、一緒に投票に行くため投票率も高いと言うこと。平年9月に総選挙があり、一年くらい前から学校を回ってプレゼンテーションを行うので、投票は義務との意識が高い（投票率85%）。

- ・彼女の議員報酬は、7万600スウェーデンクローネくらいで、市の職員より低いとのこと。従って、秘書も事務所もない。政策秘書的工作は議会スタッフが務めてくれるとのこと。

また、完全比例代表選挙のため、選挙自体にもお金がかからない。

日本の議員とは相当の開きがある。

その後日本大使館に移動し、先ずスウェーデンの国情について研修。

- ・N Fiveと呼ばれるスウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランドの中で、この国だけ1000万人の人口を擁しており、北欧の盟主とも自認している。

- ・人権・ジェンダー・開発援助の先進国でもある。

- ・技術・貿易立国である（日本は遥かに立ち後れている）

- ・エネルギーは水力>原子力>風力>バイオ>太陽光の順（原発を毛嫌いしていない）

- ・イノベーション力世界第2位（日本13位）、ライフサイエンス研究でも世界第5位

等、人口の少ない国でありながら、高い知的所有権を持ち国民一人当たりGDPでも日本の1.3倍となっているなど

次に昨日日程変更で行けなかった**学校におけるデジタル化の見直し**について、森祐介書記官が直接学校を訪問し聞き取ってくれたことについて研修。

○今回の研修目的にもなっていた、「学校教育に於けるデジタル化の見直し」については、

デジタル化先進国でありながら、

- ・先生自身が使いこなせていない、

- ・引用がデジタル化の良いところだけ書かれている、

- ・五感を大事にすべき等の理由で、デジタルと、教科書を半々で利用している。

- ・これについては毎年各学校が選択できる。選択権は学校にある。その要望の結果半々に。

- ・学校では、文具は共有材で、子どもはランドセルのようなものは持って通わない。

- ・デジタル化は、障害のある子に、より効果が高い。印象では決まらない。テストなどの回収が早いなどの良いところもある

調査六日目

本日、日曜日のため、美術館エリアの視察。

- ・近代美術館、

北海道立近代美術館建て替え計画のため参考にと訪問しましたが、一部改修中の所もあり、また、展示がリアリズム（1900年代後半から、2000年代の作品を展示）であることのほか、特別展示（？）で、妊娠から出産までの写真や出産補助器具の展示などもあ

り、美術品だけの展示では無いところに興味があった。

・国立美術館

その後近くにある国立美術館も訪問したが、ここは近代以前の作品や、ギリシャ・ローマ時代の彫刻のレプリカ、中国も含めた陶磁器などが展示され、歴史美術館というような位置づけでした。展示方法などについても今後の参考になろうかと思って視察しました。

・スタートアップ企業訪問

午後から、北海道東海大に留学したことのある方の起業した企業を訪問し、その内容について説明を受けました。

この会社はテレビ等で放送されていることを同時に翻訳表示し、また、外国語会話教育をするためのソフト開発をしています。特にスウェーデンでも移住者が多く、英語を使わない国として、会話能力が無ければ就職も出来ないことから、国もその教育を奨励しており、話をしていることをほぼ同時通訳して表示するシステムはかなり重宝されているようです。ただ、1カ国語の対応ソフト開発に数億円かかると言うことで、国の助成が無ければ難しい印象でした。

その他

フィンランド交通事情

海外視察研修から帰ってもう2週間が経ちました。今回の研修の目的は、フィンランドに於ける「ネウボラ」という総合的子育て・家族支援制度、北方民族の「サーミ族議会について」、スウェーデンのIT教育の実態について、国会への表敬訪問と政治についての研修、そして北海道立近代美術館改修に備えてのスウェーデン近代美術館視察でした。今日は番外での見聞になりますが、フィンランドの交通事情についての体験を書きます。フィンランドは北海道と同様の寒冷地で、人口も約500万人とほぼ同じ国ですが、農地はわずかしき無くその大部分は森と湖の国と言われるとおりで、居住は点在する地域の拠点に集まって住んでいます。鉄道網はヘルシンキを中心とする南部にはありますが、そのほかは高速道路と国道で結ばれています。その鉄道で一番驚いたのがヘルシンキの駅で一日券を買うと市内に発達している路面電車も含めて全ての公共交通はフリーパスで、鉄道には改札口は無くホームも道路からそのまま乗り込めるところにあり、バス停や路面電車と何ら変わりが無い事に驚きました。不正乗車はないのでしょうか？

また、高速道路も無料で、一般道と変わりが無く、地方の交差点は信号の代わりにロータリー式となっており、直進の車もそこでスピードを落とすので大事故に繋がりにくく、車が来ないのに止まって待つ事も無くスムーズな走行が出来ます。北海道でも地方の交差点に取り入れるとよいと思いました。

北欧のデジタル化

今回の訪問にあたって、出発前に現金の必要は無いとは聞いていましたが、少しはいるだろうと5千円相当のユーロを換金していきましたが、現地に行くと現金は全くと言って良いほど必要なく、ICカードか、コンタクトレス決済カードで支払いでき、こうした面では進んでいるという（日本が遅れている）印象でした。

多目的

特にフィンランドで感じたことですが、幼児保育、子育て支援、図書館など日本ではそれぞれ分けられていることが、ここでは同じ建物の中で様々なサービスや利用が出来る施設となっており、住民の多様な利用が出来るように運営されていると言うことに感心しました。所謂ワンストップ型とでも言うのでしょうか。

日本ではワンストップサービスとは言いながらなかなか縦割りが解消しないことに比べると多目的集会所的なあり方は地域住民の交流機会を増やす意味も含めて、今後参考にすべき所です。

最後に

今回の北欧研修は、議会派遣の承認を受けた、私にとっては本当に久しぶりのものでしたが、非常に多くの示唆を得る研修となりました。

この研修を計画し、調査し、現地とのやりとりをしてくれた藤沢団長や、広田議員、現地大使館、川崎東海大名誉教授等の皆さんに感謝し、調査・研修報告とします。



調査の詳細は調査報告書に委ねるとして、ここでは雑感を記すこととする。調査で痛感したことの一つに、新たな政策の導入や仮に期待した成果が得られなかった場合の軌道修正含め、政治における意思決定の早さがある。国家として「まずはやってみよう」という姿勢を示すことは、幼少期からの教育や家庭においても共通の概念として浸透し、ひいては、国民の挑戦心や社会の仕組み、多様性への取組みにも表れているのではないだろうか。フィンランドのネウボラ、図書館など国民に身近な政策や施設にもそうした成果が表れている。日本とは行政や議会の仕組みが根本的に異なるとは言え、グローバル化が進展し社会が目まぐるしく変化する今日において、国はもとより自分たちも見習うべきである。

例えば、日本においても、日本版ネウボラが法定化され、各地方行政においても子育て支援政策が進んでいるが、福祉先進国のフィンランドと比較すると、残念ながらその手厚さには違いが明確である。日本における支援とは、何かしらの問題が発生したことに対する対処の印象が強いが、フィンランドでは、子育て支援は家族支援であり、支援は問題が起こる前から予防的な支援の体制作りが構築されていた。

つまり、フィンランドは対症療法ではなく、ウェルビーイングを重視していると言える。先の第一回定例道議会での一般質問でも取り上げたが、「ウェルビーイング」とは現代ソーシャルサービスの達成目標として、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念で、1946年の世界保健機関

(WHO) 憲章草案において、「健康」を定義する記述の中で「良好な状態 (well-being)」として用いられた。最低限度の生活保障のサービスだけでなく、人間的に豊かな生活の実現を支援し、人権を保障するための多様なソーシャルサービスで達成されるものであり、一部の社会的弱者のみを対象とした救済的で慈善的な従来の福祉観に基づいた援助を超え、予防・促進・啓発といった、問題の発生や深刻化を防ぐソーシャルサービス構築に向けての転換が背景にあり、日本でも一部自治体の政策や大手企業を中心に事業計画などに取り入れる動きがあり、今後の広がりが期待される。

次にスウェーデンの語学学習支援を行うスタートアップ企業の視察では、デジタルメディアを活用した言語学習支援により、難民が語学を学ぶことで仕事や子育てを通じて、スウェーデン社会へ参加を促している。難民を単に保護するのではなく、社会に貢献することが求められるが、裏を返せば人間としての営みを可能としようとする取組みは、人権保障の考えが根底にあるように感じた。そして何よりも、スウェーデンのヨーテボリ大学と日本の東海大学の留学プログラムにより、1年間、札幌で学ばれた経験のある、Niss Jonas氏、Henrik Melin氏の二人による、社会への貢献心と情熱、その実践に深い感銘を受けたところである。

最後に、調査におけるコーディネーターや現地通訳まで担って頂き、大変お世話になった東海大学名誉教授の川崎一彦氏の「国家が成長を続けるためには、知力を養いイノベー

ションを起こし続けること。そして、そのためには何よりも教育が重要。」という趣旨の言葉が、北欧2国と日本の違いを端的に表していることを強く感じる調査であった。



■フィンランド、スウェーデンの公共交通

北欧へは初めて行きましたが、これまで訪れたどの国（主にアジア圏）よりも、“外国感”がありませんでした。フィンランド・ヘルシンキはシンプルでセンスの良いデザインが目につき、街並みはどこか懐かしくさえ感じます。北部ラップランド行きのバスの窓からの景色は、北海道ととてもよく似ていました。スウェーデン・ストックホルムは歴史ある大きな建物が多く、落ち着いたのどかな雰囲気を感じました。

そのどちらの国でも関心を抱いたのが公共交通です。フィンランド・ヘルシンキでは電車に乗って移動しましたが、駅には改札がありません。一日乗車券のようなものを買って、目的地に向かう電車が来たら乗り込みますが、ホームに駅員はおらず、長いホームの場合は乗車口と思っていたところを電車が通り越してしまうこともあるとか。車内でも次の駅の案内などのアナウンスは一切ないため、降りる駅は自分でしっかり確認する必要があります。現地ガイドさんによると、すべて“自己責任”とのこと。電車と平行に走るバスから降り、そこが停車駅であればそのまま電車に乗ったりもできます。乗り換えがスムーズで非常に合理的だと感じました。

スウェーデン・ストックホルムでは、地下鉄やトラム、水上バスで移動しました。

ストックホルムには100の地下鉄駅があり、その9割以上の駅の壁や柱には公募で選ばれたアートが施されています。各路線に乗り換えができる中央駅では、ホームが地下3階くらいまで縦に位置づけされており、下りのエスカレータは地底まで続くのではないかと思うほど深く感じました。各ホームやエスカレータの天井は、掘ったままの岩盤がむき出しの状態で、コンコースなどはまるで洞窟のようです。頑丈なため補強や加工をしなくてもそのまま使用できるとのことで、その岩盤に直接、エリア毎のテーマに沿った様々なモチーフがペイントされていて、幻想的です。

地下鉄は乗車時のみ改札でクレジットカードをタッチ、降りる時には必要ありません。改札で一度タッチ決済すると、75分以内は他の公共交通への乗り換えもできるようです。

トラムは札幌の市電同様、路面に駅がありそのまま乗車しますが、決済方法はなかなか不思議なものでした。とても陽気でフレンドリーな乗務員が、タッチ決済の端末を持って乗客の間をすり抜けながら、ひとり一人に決済をしてもらっていました。私の順番が来るまでに2駅は通り過ぎたかと思いますが、その間に決済しないで降りることも可能だったわけです。この運賃回収方法に問題はないのだろうか？と不思議に思いました。

ストックホルムは14の島からなる街で、水上バスが運行されています。地上での移動であれば地下鉄とトラムの乗り換えというところも、水上バスであれば乗り換えもなく、ショートカットできます。ベビーカーを押しながら、そのまま乗船している方々も見かけました。買い物や観光の移動に気軽に利用でき、何より水上バスから見る街の景色がとてもきれいでした。ここでもやはりタッチ決済で、乗車時にタッチした際、読み取り機に“75分”と表示されました。

今回は公共交通の調査ではありませんでしたが、北欧フィンランドとスウェーデンの公共交通を利用して、無駄がなくとても分かりやすい仕組みに興味を持ちました。タク

シーもスーパーマーケットも飲食店もタッチ決済でOK、クレジットカード1枚だけで出かけることができます。

今回経験した二つの国の公共交通は、小さな疑問もありますが、とても利用しやすいものでした。札幌市営地下鉄でも4月26日からクレジットカード等のタッチ決済実証実験が始まりました。北海道でも気軽に利用できるシームレスな公共交通が展開されることを期待します。



【広田まゆみ】

【はじめに】

視察の準備をしている際に、ヘルシンキ市、エスポー市などは、視察の受け入れを有料化しており、知的資源、人的資源、サービスの価値を大切にする姿勢に、まず、学ばされた。

今後の北海道においても、ある意味で、重要な視点だと思う。

【フィンランド視察第1日目】

現地時間の朝4時に到着後、小休憩して、11時30分からスタートし、概ね17時半までヘルシンキ隣のエスポー市を中心に視察。

1日目の日程は、ネウボラなど、子どもたちや若者施策が中心に、ヒルトゥネン久美子さん（KHジャパン マネージメント(株)）

<https://www.khjapanmanagement.fi>

のコーディネートとガイドをいただきました。

1日目の視察の様子を駆け足ですが、報告、情報共有します。

① <ネウボラ：エスポー市ファミリーセンター>

第1箇所目が、日本でも最近名前を聞くようになった「ネウボラ」です。ちょうど、これまで地域にあった地域密着のネウボラから、より専門性を強化し、かつ、広域をカバーする「ファミリーセンター」として移行した直後の訪問になりました。

ネウボラとは、妊娠がわかった直後から、住民登録をしていれば、全ての人が無料で検診や相談を受けることができる子育て支援のサービスのこと。

子どもネウボラ、親のためのネウボラなどがありますが、エスポーファミリーセンターの担当エリアでは、約95%以上の対象の子、親が、サービスを受けています。サービスを受けていない5%は、妊娠前にフィンランド外にいた人や、予防接種などのサービスを受けない人だとか。

エスポーファミリーセンターの特徴的な課題は、フィンランド語を母語としない人たちが増加していることだそうです。それだけ、フィンランド語教育や、衛生面も含めたフィンランドの暮らし文化に慣れてもらうために、かかる時間も人も必要です。

通訳は、公費で、派遣（もしくは遠隔）されます。自分たちの国の言葉で、サービスを受ける権利が保障されるということ。おそらく、10カ国以上の言語に対応していると思われます。

昨今のネウボラの広域化（基礎自治体から州などのエリアが所管へ）も相まって、多様なバックグラウンドや地域事情ごとの個別のケースにどこまで寄り添えるのか、今後の課題として想定されていました。

余談ですが、最近、世界の学力テストで、フィンランドの順位が下がっていますが、フィンランドの人たちは、学力テストの結果に一喜一憂は、していないそうです。移民の人たちと共に学び、暮らしていくには、コストや時間がかかるのは当然であると。

たまたまだと思いますが、支援の現場で活躍されているのは、普通に、元移民の方だったりします。元々、自国で教員だった方とか、フィンランドに来てから大学に入りなおして幼児教育の資格をとった方だとか一多様性を力にする土台には、多様な大人の学びなおしを保障する社会も必要だと痛感しました。

② <プレイパーク：エスポー市住民公園>

2箇所目は、エスポー市の「住民公園」です。

こちらは、エスポー市が運営する無料の子育て支援サービスの一環としての16の公園の一つで、ヘルシンキ市では、「プレイパーク」と名付けられているもの。

午前中は、学齢前の親と子が遊べる空間であり、午後以降は、日本で言う学童保育になります。

気温2℃くらいの肌寒いフィンランドですが、外で、子どもたちが思い切り群れて遊んでいました。ボール遊びや、それぞれが思い思いの遊びを楽しんでいます。ちょうど、15時から、職業大学のためのフィンランド語講座があるので、見学はそれまでの時間にと聞いていましたが、イランや、モルドバなどから移民した赤ちゃんを乳母車で連れのお母さんたちが、続々と集まってくる姿に底力を感じました。

さて、こちらの住民公園のスタッフは4人。公務員です。説明を担当してくださった方は、大学で、ユースアクティビティについて3年学び、その後、インターンシップを経て、勤めて半年。彼女も、また、フィンランド語を母国語としない人でした。

また、印象的だったのは、いわゆる保護者との関係性でした。もし、子どもたちが、転んで怪我をしても、保護者からクレームが来るようなことはないとのこと。なぜなら、住民

「公園」なので、基本的には、自己責任のようです。ただし、保険に入っているので、保険で保障はするとの回答でした。

そして、自己責任というからには、何をして遊びたいか、どういうルールが必要かは、子どもたちが自分で決めるそうです。

日本の「公園」では、ボール遊びをしてはいけないとか、大きな声を出してはいけないなどのルールがあると話すと、絶句していました。。。

公園、もっと言えば「公」の概念が大きく違うんですね。日本では、公は、お役所をさすような気がしますが、フィンランドでは「公」とは、まさしく自治のことかもしれません。

③ <ユースセンター ✕ 図書館>

1日目の公式の視察の最後は、エスポー市の公設図書館内にあるユースセンターでしたが、オプションで、ヘルシンキ市のオーディ中央図書館も視察。

話を聞いたエスポー市ユースセンターのソーシャルワーカーの方は、20年近く勤めていますが、実は、コソボからの移民で、元教師だそう。家族とは離れ離れになったが、この仕事をしている中で幸せを感じていると話してくれました。

いわゆるユースセンターについて話す前に、まず、図書館の概念が、異なります。

図書館は「市民の居間」だそうです。そして、その中心に、子どもたち、若い人たちの姿がありました。昨今、札幌など都市部では、子どもたちが勉強する場がないと課題になっています。図書館でも、フードコートでも、あまり歓迎されない。

しかし、エスポー市のセッロ図書館でも、オーディ図書館でも、子どもたちが、ゲームをしたり、遊んだり、3Dプリンターや、ミシンを使って、作品作りをしていました。オープンスペースに、電源がたくさんあって、群れて話したり、作業したりする若い人たちがほんとうに多かったです。

エスポー市のユースセンター自体は、基本的に、10代のこどもたちが対象で、ゲームなどの使用は、子どもたちが優先されますが、大人もちろん、入っても大丈夫でした。日本の漫画、アニメなどもたくさん置かれていたことも印象的でした。

さらに、図書館ですが、楽器の貸し出しなどもあり、まさに、文化の拠点、若い人たちに、どうしたら足を運んでもらえるのかを考えた場所にもなっていました。

<番外編>

■公共交通

まず、本日は、公共交通で移動。ヘルシンキ市（60万人）、エスポー市（30万人）など、首都圏で全ての交通機関に使えるワンデイチケットがありました。一度チケットを買って、チェックインすると、その後は、改札などのしくみがありません。駅にも、駅員さんの姿は全くなく、アナウンスも本当に必要最小限しかありません。いわゆる国鉄なのですが、高架や改札のための施設もなく、ある意味路面電車のようなようでした。おそらく、フィンランドだったら、北広島の球場前にすぐ駅を作ってしまうそうです。

■カンピ礼拝堂

ヘルシンキ滞在は1日なので、朝、出発前に見学してきました。面白い木造建築の建物でもあり、ヘルシンキの中心街で静寂を味わってほしいと2012年から一般開放されています。キリスト教ルター派の教会ですが、全ての方に門戸を開いているそうです。

【フィンランド視察第2日目】

<サーミ博物館>

首都ヘルシンキから、空路で、サヨスに移動。飛行機が機材の都合で遅れましたが、サーミ博物館を見学させていただきました。

サーミとは、ヨーロッパで唯一先住民として認定されている民族で、トナカイの狩猟などを生業とし、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、ロシアにまたがって今も生活しています。驚いたのは、サーミ族の中でも、3つの異なる言語があること。さらに、その3つあるサーミの言語の復活のためにアートや幼児教育などのアプローチで努力されているお話は、印象的でした。

展示品の内容は、それぞれのサーミのみなさん自身の意見も反映されて決められていくとのこと。ヘルシンキにある国立博物館にあった収蔵品の多くも、こちらのサーミ博物館に返還され、サーミ関連の収蔵品が最も集まる博物館となっています。

白老のウポポイとも昨年の12月に、改めて、連携協定を結ばれたそうです。

<番外編>

■世界一美味しい水

フィンランドでは、宿泊したホテルでも、世界一美味しい水道水とPRしていて、空港にも、水道水を補給できることがあります。

北海道でも、是非、取り入れたいですね。アイヌ文化や縄文文化、世界自然遺産や、国定公園関連の施設は特に！そんなにお金がかからないと思いますし。

フィンランド視察3日目】

<サーミ自治体議会>

3月28日の午前中は、サーミ議会議員のアンニ・コイヴィスト（Anni Koivisto）さんと意見交換させていただきました。アンニさんは、現教育委員会委員長。前任期には第1副議長を務め、教育、言語、社会・医療サービス、「真実と和解のプロセス」に関する問題に積極的に取り組んできた。現在も、サーミ議会で社会・医療担当。イナリ市議会議員としても活動されています。

サーミは、ヨーロッパで唯一、先住民として、認定された民族であり、ノルウェー、スウェーデン、ロシア、そして、フィンランドにまたがる民族です。

サーミ議会は、フィンランドをはじめ、ノルウェー、スウェーデンに設置されているが、フィンランドにおいては、「文化的な自治」を確立するための基礎組織であるとのお話があった。

サーミ議会は定数21名。年間5回開催されている。選挙は、4年に1回行われており、フィンランドでは、サーミとしてのアイデンティティを表明しているのは、1万人程度だが、選挙人登録をしている人は、6000人程度である。

選挙人の定義が議論になっているが、その決定に際し、フィンランドの行政機関や、国際機関でもなく、サーミ自身が決められる仕組みにすることが課題とお話しされていた。

基本的に、すべての子どもたちに教育が無償で保障されているので、就学支援の制度はないが、現行法の元で、特に、力を入れているのが、サーミ語の復活である。

サーミの中において、全く異なる3つの言語（方言ではない）があることが意外な気がしたが、特にフィンランドにおいては、3つのサーミ語の母語としての復活に、幼児教育や学校教育の現場で教科書づくりなどにも努力がされている。人材育成や教材は、中央政府の予算で保障される。

ここ数年、司法によって、サーミの漁業権が尊重される判決が重ねられているが、サーミ議会が提案する「サーミ議会法」は5回の内閣によって、受け止められてはいないことが課題だそうだ。

最後に、環境保全や、サーミの文化の持続可能な発展のためにも、今の観光のあり方などについて、サーミの視点から提言するアート作品が印象的であった。

アイヌ民族当事者ではない私が、北海道の未来のためにできることは何か、北海道におけるアイヌ議会などの可能性について、母語としてのアイヌ語教育の保障などについて、これまでの文化振興や、支援の枠組みを超えていく必要性を感じました。

当初の予定では、この日に、フィンランドからスウェーデンへ移動し、ストックホルムのスウェーデン語学校（スウェーデン語を母国語としない人たちのための民間の学校）に行く予定であったが、フィンエアのストライキに遭遇したため、予定外にフィンランドに1泊した。

それはそれで、貴重な経験でした。

【スウェーデン視察1日目】

＜デジタル化とは誰のため、何のためか＞

フィンランドエアのストライキの影響で、早朝の便で、イヴァロ→キッティラ→ヘルシンキ→ストックホルムと、乗り継ぎ3回で、3月28日の現地時間の13時半ごろ、ストックホルムの空港に到着。ここだけ、専用車をお願いし、地元日程を変更して待機して下さったボリアナ・オーベリ議員(日瑞議員連盟代表)にお目にかかるため国会議事堂へ。向かう途中に、今回、現地コーディネートでお世話になった 川崎一彦東海大名誉教授から昨今のスウェーデン情勢について話題提供をいただく。

国会では、ジェンダー平等などを中心に、北海道議会ダイバーシティ研究会(藤沢 澄雄会長)の活動紹介など含めて、意見交換と国会見学。

8月に日瑞議員連盟の皆さんが大阪万博のために来日予定なので、札幌での勉強会などのご提案と合わせ、ウポポイのPRも！

この視察の報告も兼ねて、是非、スウェーデンの国会議員の皆さんとの意見交換、交流の場を設けたい。

その後、在スウェーデン日本国大使館へも走る。

これまた予定を変更して、待機して下さった在スウェーデン日本国大使館一等書記官の森祐介さんからレクチャーいただく。

メインテーマは、スウェーデンのICT教育であったが、まず、スウェーデンの概況とともに、私たちが行けなかった学校現場も代わりに視察して下さり、授業の様子や、学校現場の声もインタビューして下さった上で、私たちからの質問事項であった小学校における核シェルターの写真まで撮ってきて、お話しいただきました。ありがとうございました。

印象的であったのは、政権交代により新しい大臣が、ICT教育をこれ以上進めないと宣言したが、現場や、世論においては、そのエビデンスとして採用した学術論文に偏りや、また、過去10年以上論文を発表していない学者であること、さらに、その大臣自体が、ICTを使いこなせていないという指摘なども、現場の学校から上がっているというエピソード。

政策の発生源が明らかであるので、議論も開かれていて、合理的だ。

また、そもそも、教科書などの選定も各学校に任されているため、子どもたちにとって何がよいか、あるいは学びのテーマによってどちらがよいかなど、現場では、ICTと紙を、結果として、半々で組み合わせて使用しているとのことのお話しであった。

さらに、森さんの元々のご専門が、科学技術・イノベーション担当のため、スウェーデンのデジタルガバメント庁(財務省所管)の取り組みについてもお話しいただいた。

まず、スウェーデンのデジタル化は、「何のために」の目的が明らかである。

『今日、そして、将来の人々のニーズ(可能性)を満たす持続可能な福祉社会に必須のもの』として、特に高齢者などには負担があるのは承知しているが、そこを乗り越えようとしている決意が、ある程度、国民間にも共有されているようだ。

日本の場合は、デジタル化が、目的になってしまって、何のためのデジタル化なのかがよく見えなくなっているのではないかと。

そして、驚いたのは、個人認証は、民間の銀行の連合体が開発したアプリが使われていることだ。2022年現在、スウェーデンに住民登録がある18歳から65歳の99.2%が利用している。

この公的個人認証がある前提だが、住所変更や、育児休暇申請等の行政手続き、公共料金の申込、変更、解約、電子決済、病院予約や受信処方履歴取得、スーパーなどのメンバー登録やポイントなど、ほぼあらゆることができる。

結果として、多くの人が市町村役場に出向く必要がなくなっているようだ。これは、私見だが、ある意味で、ほんとうに相談が必要なケース、ICTには頼れない特別な問題に、人の力を集中することができるようになることを期待する。

イノベーションとは、誰のため、何のためなのか、その技術や商品によって、どんな変化を地域社会に起こしたいか、それを突き詰めて考え抜くことではないだろうか？

それを明確にした上で、では、幼児教育、学校教育はどうあるべきか？道庁や市町村役場のこれからの使命とは何か？改めて考え抜くことなく、デジタル化やICT化を進めても、疲弊や混乱するだけかもしれない。しかし、コロナ禍を経て、もはや、時代は後戻りできないのは確かだと、その覚悟をどれだけ共有できるのかと突きつけられたようなストックホルム1日目でした。

【スウェーデン視察2日目】

3月29日の研修は、日中は、世界一長い美術館と言われる地下鉄美術館から。土曜日は、基本的に、スウェーデンの方はお仕事をされないそうで、視察先の確定には、少し苦労しましたが、夕方は、デジタルの力で、スウェーデンにおける社会課題の解決に取り組んでいるNPO法人を視察し、意見交換させていただきました。

＜ストックホルム近代美術館＞

まずは、「ストックホルム“近代、美術館”」を全体で視察。「道立“近代、美術館”」の改築も予定されているため選びました。ストックホルム市内には、実にたくさんの美術館、博物館がありますが、近代美術館は、思いっきり近代、現代に振り切っているので、とても刺激的な空間でした。個人的には、道立近代美術館のこれからを考えると悩ましいです。インバウンドのみなさんは、近代（英訳すると現代ともとれる）という表記と、展示内容について、混乱しないかしら。

この視察をもとに、文教委員会にて、北海道近代美術館のこれからについて、改めて、質問もしました。よろしければ、ご参照ください。

[20250408.pdf](#)

<NPO法人言語の力>

さて、今回の視察の最終セッションは、日本語に直訳すると「言語の力」というNPO法人スプロークラフトのオフィスにて意見交換。

<https://www.facebook.com/sprakkraft>

2015年にシリアの難民を最も大量に受け入れたのは、ドイツとスウェーデンでした。スウェーデン語を母国語としない人たちが、スウェーデン社会の中で孤立しないように、ほとんどすべての人が手にしているスマホを使って、無料で、スウェーデン語の勉強ができたり、翻訳ができるアプリを開発し、運営している非営利組織です。

今回は、現在のCEO Henrik Melin (取締役)さんと
Niss Jonas Carlsson (創設者)さんにお話をうかがいました。

彼らは、スウェーデンの公共テレビ放送局SVT(日本のNHK?)が、聴覚障がいを持つ人のために字幕をつけた番組コンテンツが約14,000本あることに着目しました。

習熟度別に字幕テキストの中の単語が色分けされ、タップすると、辞書的機能としても使えます。それ以外にも、字幕があるコンテンツには、カラオケなども含めて応用可能なようです。すごいですね。

国連や、ヨーロッパ放送協会においても、難民の支援のためのデジタルソリューションの最も素晴らしいものとして、高く評価されています。

活動の資金源は、スウェーデンやフィンランドの国営テレビ、アイスランド政府などで、年間1億円以上の事業規模になっているようです。素晴らしいミッション、着想、実践の活動に敬意を感じました。

一方、スウェーデンの現政権は、難民の受け入れに抑制的です。また、例えば政権を批判するような国営放送の中立性に対しては、公的資金が削減されるなどの動きが、各国で見られて、資金的には困難な面も予測されているそうです。

このお2人は、実は、スウェーデンのヨーテボリ大学と日本の東海大学の留学プログラムで、約1年間、札幌で学ばれたこともあるそうです。今回の研修は、現在、スウェーデン在住の川崎 一彦東海大学名誉教授のご尽力で実現しました。ありがとうございます。

北海道における日本語教育の課題についても話題になりましたが、何か、一緒に、北海道のためにも、地球の未来のためにもできることがあれば幸いです。

デジタルに使われるのではなく、デジタルによって社会課題をどう解決するのか、北海道人の私たちにとって、最も不足している視点であることを体感したストックホルム滞在になりました。

【最後に】

海外視察に関し、さまざまなお意見があるが、北海道の未来を考えると、費用対効果としては、規模感や、その気候風土の特殊性などから、道外視察よりも、むしろ海外視察の方が有益ではないかと、個人的には思う。もちろん、海外調査も、自費で、個別に行くこともできるが、会派を超えて、北海道の未来のために必要な共通認識や、共通言語を育むための時間と視点を共有することは有意義であった。

さらに、言うまでもなく、海外調査に行く前のさまざまな準備や事後の取り組みこそが重要であり、8月に日瑞議員連盟の国会議員団が来道されるので、北海道とスウェーデン、ひいては、北方圏との交流関係の再構築に貢献したいと思う。



5日間にわたるフィンランド・スウェーデンにおける調査派遣に感謝を申し上げる。今回の調査項目は多岐にわたることや、調査団の報告書もあることから、調査項目の一つであったフィンランドにおける少数民族サーミ族の権利回復に関する取り組み調査を通して、今後の議会議論に参考にしたい点について報告したい。

・サーミ族はスカンジナビア半島北部、ノルウェー・スウェーデン・フィンランド・ロシアの一部にまたがる地域に暮らし、トナカイ放牧を生業としてきた少数民族であり、ヨーロッパで少数民族として認定されている唯一の民族でもある。今回はフィンランドにおけるサーミ族の現状について調査ならびに意見交換を行った。

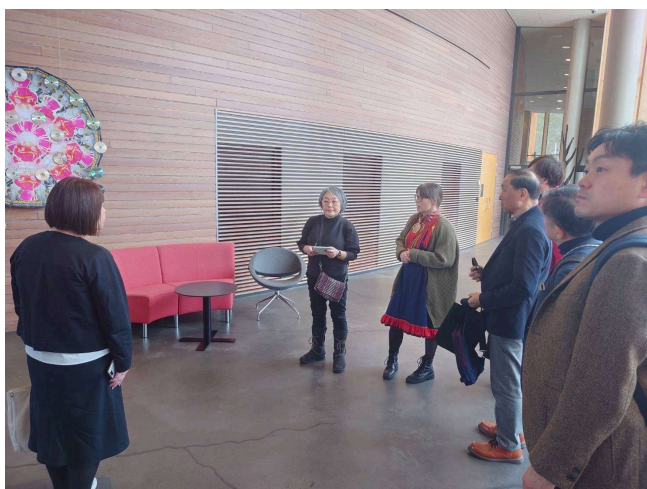
サーミ族においても、日本政府におけるアイヌ民族の同化政策、長く差別が続いてきた。現在、民族のアイデンティティでもある言語の復権、文化的な自治・権利回復などを図るため、サーミ議会が設置されている。今回はサーミ族の文化歴史を伝えるサーミ博物館とサーミ議会を訪問し、それぞれ学芸員から説明聴取ならびにサーミ族議員との意見交換を行った。

まず、サーミ博物館についてはいわゆるサーミ族の歴史、文化、現代におけるサーミ族の現状について紹介をされていた。白老町にある民族共生象徴空間「ウポポイ」にも共通することだが、少数民族の歴史や文化に関する貴重な展示や説明は当然重要である。しかしそこに不足しているのはマジョリティの側による支配体制がどのように行われてきたのか、詳細な説明が必要であると感じている。サーミ博物館では、フィンランド人の同化政策に宗教がその役割の一端を担っていたことも紹介されていた。（フィンランド語での説明のため、十分な和訳ができなかったが）どの時代においても、少数民族がその言語や権利をはく奪され、近代化・同化政策（日本であれば旧土人保護法）により、国民の一員とされることが世界共通である。ウポポイにおいて今後重視すべきことは少数民族に対する同化政策などがどのようにして行われてきたのか直視するための取り組みが求められている。

サーミ議会ではanni koivisuto議員と意見交換を行った。フィンランドにおけるサーミ議会の役割は文化的な自治をめざすことという。サーミ議会はサーミ人による選挙で、21名のサーミ人議員を選出する。議会においてもサーミ語（実は全く異なるサーミ語が3言語ある！）・サーミ文化の復権・権利回復などサーミ人がサーミ人であることを保障するための議論が行われており、必要によって政府に提言・要求するという。また議会に付随し、教育委員会（ちょうど委員がサーミ語教材についての議論を行っていた）や言語委員会、産業委員会など、サーミ人にとって必要な委員会を設置している。

ここまでみると、少数民族の意見表明の場として機能しているようだが、実際は漁業権の回復など、中央政府には十分受け止められているとは言えない面もあり、まだ、課題は残っていると感じる面もある。

今回は時間の関係により、あまり深掘したことが聞けなかった。（例えば自身がサーミであることの証明をどうすべきか、サーミであることによる様々な差別、いわゆるフィン人が大多数である中、多くの若者がすでにサーミ人が多く住む地方を離れて生活している実態にどのように向き合おうとしているのか等。）ただ、一番重要なことはここで語られていた「真実と和解のプロセス」である。私自身が道外出身者でアイヌ民族の歴史、課題、そもそもの存在を高校の修学旅行で北海道を訪れるまで知らなかったこと、このことが少数民族の存在を消すことにつながっていたことを改めて認識した。私がマジョリティの立場だと（私自身がそうだと仮定）すれば、歴史を都合よく解釈することも可能であり、少数民族に関する教育を受ける機会がほぼなかったこと、積極的に学習する姿勢を持たない限り、少数民族の存在はないものになってしまう。ウポポイが動き出した今だからこそ、アイヌ民族に関する博物館や資料館の存在が重要であり、積極的な活動展開が求められる。さらに言えばマジョリティ側が考える少数民族の在り方ではなく、少数民族側が考える課題解決のあり方をまずは受け入れることから活動を始めなければならない。北海道がこれまでも今もこれからもアイヌ民族がともに暮らす土地である以上、アイヌ民族の権利尊重や消滅危機言語に指定されているアイヌ語の保全・母語としての機能回復、文化振興などに関する議論が行うことができる公的機関の設置が必須と考える。公的機関における議論を北海道は真摯に受け止め、施策に反映または、道民に伝えるなど、アイヌ民族がこれまで受けてきた歴史について真剣に正面から向き合う時期が来ているのではないだろうか。



調査を振り返ると、「共生社会」という文言が調査全般の共通ワードとなっている。まず、フィンランド北部ラップランド地方に居住してきたサーミの調査では、サーミ人からの視点と共に「共生」という考えの必要性を感じた。サーミの政策はアイヌ政策に通じるものが多く、差別解消、そして文化保存や言語の復活などは広く国民の理解と共に進める事が必要だと考える。

フィンランドの子育て支援施設ネウボラやプレイパーク（学童保育施設）では移住者家族のケアが重要なテーマとなっていた。また、図書館での若者の居場所づくり、スウェーデンでの語学支援アプリの開発などで、直面する移民・難民との共生社会のあり方が問われていることも実感できた。

私たち日本では、人口減少、高齢社会による労働力不足が喫緊の課題である一方で外国人への依存は増すばかりだが、国は既に在居住する外国人材に対して「移民」という言葉は使わない。全く理解はできないとは言えないが、立場を代えて「外国人から見た場合にはどう映るのか？」そんな視点での考察も必要だと思う。先進諸国が労働力不足に陥り外国人材の獲得競争が起こる中で、「選ばれる国」として問われる時期が来ることを考え、共生社会への対応をより積極的に取り組む必要性を感じる。

更に、ジェンダーイコールの観点からスウェーデン国会での調査を行なったが、私たち日本におけるジェンダーに関する土壌の違いを痛感した。女性活躍社会の推進は、女性を優遇するという考えではなく、同じスタートラインに立つという考えから始まっている。特に国会のような意思決定機関におけるジェンダーイコールについて考察することは男女の「共生」として考えることができると思う。「共生」には、多数に限らず少数の意見や「違い」を認め、共に暮らすための知恵が問われるが、必ずと言っていいほど「排除」の論理が表面化することも事実だ。集団として異質を排除する傾向は社会現象として「必然」とも考えられるが、一方で「多様性（D）」こそ「持続可能性」の保持にもつながっているという事実も忘れてはならない。そのような考えが根付いていけば、性別におけるアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）の見直しに繋がっていくのではないかなと思う。

米国では行き過ぎたDEIの反動（バックラッシュ）という構図で、アファーマティブ・アクションが憲法違反だとする判決を支持する声が大きくなりつつある。しかし、「同じスタートラインに立つ（公平性・E）」という考えは、決して間違いではないと考える。例えば障害者への配慮であるバリアフリーの考えは、今では誰もが反対はしないけれど、それとアファーマティブ・アクションは同類とは言えないだろうか。同じ考えの下にクォータ制のように男女比に考慮することは決して理屈が通らないとは思わない。このような社会環境や常識の「変化」を時代に合わせて取り入れるという考えこそ「寛容」に通じるのではないだろうか。変化の全てが正しく、それを受け入れるべきだとは言わないが、排除ありきではない柔軟な対応こそ「インクルージョン・I」の考えなのだと思う。

最後に、私たちが訪れた北欧のフィンランド、スウェーデンは国民の幸福度が高いことで知られている。充実した福祉政策と言われるが、幸福度の高さの要因はそれだけなのだろうか？（フィンランド・1位、スウェーデン・4位、日本51位、2024）

例えば選挙における高い投票率は、個々の政治参加への高い意識の表れであり、それが政治への信頼度について、日本のそれとの差になっているとは言えないだろうか。国づくりに対して国民としての責任感、主体性。そのような考え方と幸福感との関係はないだろうか。幸福は他人から与えられるものではなく、自ら得るものだという考えが根底にあるのかもしれないと思う。そして、幸福とは他者との比較によって測られるものではないはずだから・・・



＊最後に「北海道議会海外調査派遣 取扱要領」の改正を調査団として強く求めたい。

今回の調査において移動時の航空便が一部欠航となり、日程変更を余儀なくされた。その為に新たな航空便の予約、宿泊先手配、更に予定されていた訪問先との連絡など、その対応は決して容易なことではなかった。今後は派遣事業を無事に行う為に添乗員の同行を認めるべきだと強く感じた。

更に、日程変更による宿泊費の追加が生じ、結果として海外調査費用の上限（８０万円）を上回ることになり、超過分が各議員の個人負担となった。議会としての派遣であるにもかかわらず、このような不足の事態への対応が規定上想定されていない事には疑問を抱いたところであり、取扱要領の見直しについて検討を求めるものである。

